

唐宋易学における「地理」の語義の変遷

益田理広

筑波大学生命環境系・非

地理学の語源たる「地理」の語は五経の一、『易経』を典拠とする。『易経』は哲学書としての性格を有し、「地理」の語義についてもその注釈を通し精緻な議論が展開されている。本稿は、初期の「地理」注釈である唐宋の所説を網羅し、東洋古来の「地理」概念がいかなる意味を以て理解され、かつどのように変遷したのかを明らかにしたものである。

唐代における最初期の「地理」には、地形や植生間の規則的な構造とする孔穎達、及び知覚可能な物質現象たる「気」の下降運動とする李鼎祚による二説が存在する。

続く宋代には「地理」の語義も複雑に洗練され、次のような変遷を経る。即ち、「地理」を(1)位置や現象の構造とする説、(2)認識上の区分に還元する説、(3)形而上の原理の現象への表出とする説、(4)有限の絶対空間とする説の四者が相次いで生まれたのである。

これら多様な「地理」の語義は、東洋地理学および地理哲学の伝統の一端を開示する好資料といえる。
キーワード：東洋地理学、地理哲学、空間概念、中国哲学、易経

I 序

1. 研究目的

斯学に冠されたる「地理」なる語は、五経の第一である『易経』に由来する。『易経』は本文である『周易』、および孔子がその哲理を説き明かしたと伝えられる『十翼』から構成されるが、『十翼』中の一篇である『繫辞上傳』が「地理」の典拠である。そこには「仰以觀於天文、俯以察於地理、是故知幽明之故（仰ぎては以て天文を觀、俯しては以て地理を察る。この故に幽明の故を知る）」とあり、「地理」は「天文」と対を成し、「俯して以て察」られる所の観察の対象であり、その観察によって「幽明之故」を知り得るとされていることが分かる。しかし、そこに「地理」の語についての説明はなく、『易経』の文面のみからその意味を知る由はない。

それでは、これらの語義や文意は意味不明のものとして打ち棄てられたのか。無論そうではない。「地理」の出典たる『易経』は五経の筆頭として長らく尊重されてきた。『易経』は、「他の經

書に先立ち、且つその原理的な役割を果たし」、「儒家の原理的な思想表現は、この易経の解釋を根據として發表されてきた」（今井、1958:序1）といわれるように、儒学における理論および概念規定の源泉であった。それは、『易経』に対する注釈が、本文の文献学的な理解のみならず、儒学者各人の持つ学術理論の表明の場としても利用されたためである（今井、1958:序1）。このような性格を持つ『易経』は、現代中国でもなお学術上重視されており、「易学は人文地理学の哲学的方法論である」（孫、2012:274）といった言明さえ認められる。そして、その理論表明を目的とした注釈の主たる対象こそが、「地理」の直接の典拠である『繫辞上傳』である。これまでも多数の学者が『繫辞上傳』に対する注を介して各々の宇宙論や形而上学を展開しており、「地理」のような語彙についても、第一にはそれら注釈の所説に従って理解されたのであった。

ところが、既往の研究においてはこの種の実実は余り注視されなかったようで、「地理」の語義を説明する際には、そのただ字義を斟酌するか、

もしくは孔穎達による「地理」に対する最初の注釈を紹介するにとどまる。「地理」を「土地ないしは台地のすじめであり、大地における様々な状態つまり「ありよう」を指したもの」とする海野(2004:48)や「地の理(地上の山川で生み出される大理石や瑪瑙の筋目のような形状)」とする秋山(2013)の定義は、まさしく字義に依拠したものである。また、『易経』以外の文献における「地理」の使用例を基に、その語義を論じる例も見出される。「地理」の語は『易経』を典拠としながらも、後世、地誌や紀行文といった書物や、風水や堪輿学として知られる占術書の書名に用いられていた。こうした経緯から、海野(2004)は、史書の文献目録から「地理」の語を含む書名を計上し、文献の内容との相関からその語義を推測している。海野によれば、「地理」は客観的な地誌的記述と占術的な風水的記述をあわせ持った、曖昧模糊たる概念であるという。しかしながら、字義と書名を用いた研究のいずれにしても、「地理」の一語が示す概念の推定の域を出るものではない。

中国の既往研究では注釈書の存在がある程度は意識されており、胡・江(1995:55)の「大地とその上に存在する山河や動植物を支配する法則」という定義をはじめ、于(1990:17)や中国科学院自然科学史研究所地学史組編(1984:11-12)『中国古代地理学史』の「地理」の解説はいずれも唐の孔穎達の注に従っている。あるいは西川(1985:1)の「『地理』の語源は…大地に現れた模様である。それは、山川草木などの自然事象と、集落・道路・農地などの人文事象とが織りなす景観である」という解説も、地表の諸事物そのものではなく、それらの構成する全体を「地理」とする点で、孔穎達に基づくものに類似する。しかしながら、孔穎達の注釈は「地理」の定義としては最古のものであり、この注釈のみを用いた語義の解釈は十全とは言い難い。仮にも『易経』を出典とする本

来の「地理」の語義を求めるのであれば、伝統的な解釈の変遷を知るべきである。

そこで、本稿は、上述の『易経』注釈書に目を向け、「地理」の語が近代以前にいかに関解されてきたのかを詳細に検討する。繰り返しになるが、『易経』に「地理」の出典が認められる以上、「地理」の定義は第一に注釈書を通して行われる。伝統的な「地理」解釈は『易経』の注釈より出発するのであり、「地理」なる語の持つ通念も、その出自を辿れば必ずこの注釈書に帰着するのである。とはいえ、本稿の紙数を以て全時代の注釈の通覧は困難であるから、まずは前述の孔穎達を生んだ唐代(618-907)から、思弁的な儒学である朱子学(宋学)の登場によってその後の東洋学術の原型を作り出した宋代(960-1279)までの「地理」解釈を分析する。宋代の学問は、後代の朱子学の官学化によって広く漢字文化圏の教養と化したために、近世以前の儒学者に加えて、欧語文献の翻訳を行った江戸期から明治期の蘭学者や洋学者にも基礎知識として共有されていた。辻田(1971:52-55)も「易経でいう地理をただちに今日の意味で理解するのはやや早計」としながら、その「易経でいう地理」について「古典ギリシャ時代の造語であるゲオグラフィアに相当する」と述べるように、「地理学」なる「ゲオグラフィア」の訳語も、それに伴う西洋地理書の翻訳も、儒学的教養を前提とする文化の上で成立したことが予想される。それゆえ、現代の東洋に受け継がれた「地理学」なる語の原義は、唐宋の易学における「地理」の語義を把握しない限りは分明たり得ないであろう。以上より、本研究は、唐代から宋代にかけての『易経』注釈書に記された「地理」の定義を網羅するとともに、その概念としての変遷を体系的に記述することを目的とする。

2. 研究対象

以上の目的から、本研究では古今の典籍を網羅する『四庫全書』（1781年成、ただし本稿が用いるのは臺灣商務印書館発行の景印文淵閣四庫全書本、1983年刊）、およびその補遺である『續修四庫全書』（上海古籍出版社、2002年刊）を用い、両叢書に含まれる易経注釈の内、宋代以前に記されたものを対象とする。『四庫全書』および『續修四庫全書』の併用は、易経注釈書の採録数において比類がなく、かつ、清朝の勅纂による『四庫全書』の採録が近代以前の価値観を反映するという点で、伝統的な「地理」の語義の分析を企てる本研究には最適である。『易経』に関わる網羅的な叢書としては、他に『無求備齋易経集成』（文芸出版社、1976年刊）があるが、その採録数が『四庫全書』と『續修四庫全書』の併用には及ばないこと、神秘的な予言書の一つである「緯書」に関係する文献を重視するなど採録の方針が本研究の目的となじまないことから、直接の使用は控えた。

研究対象となる易類に該当する文献は『四庫全書』に66種、『續修四庫全書』に14種の計80種が収められている（表1）。その内、「地理」およびその関係箇所への注釈が存在するものは『四庫全書』に30種、『續修四庫全書』に7種の37種であり、更に7種の文献において内容の重複が認められる。従って、本稿の検討の対象となるのは、これらの重複を除けば30家の所説となる。なお、『四庫全書』『續修四庫全書』所載の文献は資料として扱い、参考文献としては記載せず、表1を以てこれに代えた。表1における文献の時代区分については『四庫全書』『續修四庫全書』の記載に従った。この他、易注ではないが「地理」に関する解釈を補足する文献として、張載の著作である『正蒙』（1076年成；張（1978）を使用）、朱熹の語録である『朱子語類』（1270年成；朱（1962）を使用）も参照した。

当該文献を引用する際には現代語訳と表1中の文献番号を掲げ、直接の出所となる『景印文淵閣四庫全書』（引用の際は「四庫」と略）『續修四庫全書』（「續修」と略）の冊数及び頁数を記した。ただしこれらは縮刷版の影印本であり、ほとんどの場合一冊中に複数文献が収められている。そこで、引用箇所を正確に示すため、注には原文とともに当該文献の巻名及び頁数を附した。なお、現代語訳は筆者自身によるものであるが、漢文で書かれた易注という文献の性質上、直訳のみでは難解を極める部分があるため、訳文には原意を損なわない程度の補足を括弧内に付加している。

また、序に述べた通り、『易経』において「地理」は「天文」と一対であり、両者の観察により「幽明之故」の認識が可能とされる。そのため、本研究では「地理」とともに「天文」を検討の対象とし、必要に応じて「幽明」をも取り扱う。これに加え、やはり『繫辭上傳』に記される「在天成象，在地成形，變化見矣（天に在りては象と成り，地に在りては形と成り，變化見はる）」という一文にみえる「天文」「地理」と密接な関係を持つ概念である「象」「形」にも適宜言及する。なお、本稿において検討した「天文」「地理」の定義を整理したものが表2である。以下の論述の補助として用いられたい。

II 唐代の「天文」「地理」概念

「天文」「地理」の最古の用例は『易経』であるが、この両語に対する注釈の出現は、前述の通り唐の孔穎達（574-648）を俟たねばならない。『易経』以降にも『史記』や『漢書』にわずかな用例を見るものの、これらの史書には「天文」を天体、「地理」を地形と同義として扱う簡素な表現のみられるばかりである。また、鄭玄（127-200）や王弼（226-249）、韓康伯（332-380）といった初期の易経注釈者もこの二語には注意を払っていない¹⁾。

表1 研究対象となる文献（『四庫全書』『續修四庫全書』所載）

	文献番号・文献名・編著者名（成立・刊行年）	文献番号・文献名・編著者名（成立・刊行年）
	『四庫全書』所載文献	
	周～漢～魏晉代	
	1. 『子夏易傳』卜子夏 撰 (不明)	41. 『易圖說』吳仁傑 撰 (不明)
△	2. 『周易鄭康成注』鄭玄 撰 王應麟 編 (不明)	42. 『古周易』呂祖謙 編 (不明)
△	3. 『增補鄭氏周易』鄭玄 撰 王應麟 輯 (不明)	43. 『易傳燈』徐總幹 撰 (不明)
	惠棟 考補 ●	44. 『易神傳外編』林至 撰 (1335-1340年刊)
	4. 『陸氏易解』陸績 撰 姚士舜 輯 (不明)	● 45. 『厚齋易學』馮椅 撰 (不明)
△	5. 『周易注』王弼・韓康伯 撰 (不明)	● 46. 『童溪易傳』王宗傳 撰 (不明)
	唐代	● 47. 『周易總義』易祓 撰 (不明)
●	6. 『周易注疏附略例』王弼・韓康伯 注	48. 『西谿易說』李過 撰 (1198年成)
	陸德明 音義 孔穎達 疏 (653年以前成)	49. 『丙子學易編』李心傳 撰 (1216年成)
●	7. 『周易集解』李鼎祚 撰 (不明)	50. 『易通』趙以夫 撰 (不明)
	8. 『周易口訣義』史徵 撰 (不明)	51. 『周易卦爻經傳訓解』蔡淵 撰 (不明)
	9. 『周易舉正』郭京 撰 (不明)	52. 『易象意言』蔡淵 撰 (不明)
	宋代	53. 『周易要義』魏了翁 輯 (不明)
	10. 『易數鉤隱圖附遺論九事』劉牧 撰 (不明)	54. 『易翼傳』鄭汝諧 撰 (不明)
●	11. 『周易口義繫辭』故瑗 撰 倪天隱 述 (不明)	● 55. 『文公易說』朱鑑 撰 (不明)
●	12. 『溫公易說』司馬光 撰 (不明)	56. 『易學啓蒙小傳附古經傳』稅與權 撰 (不明)
●	13. 『橫渠易說』張載 撰 (不明)	57. 『周易輯聞附易雅』筮宗・趙汝楳 撰 (不明)
●	14. 『東坡易傳』蘇軾 撰 (1089年以前成)	● 58. 『用易詳解』李杞 撰 (不明)
	15. 『伊川易傳』程頤 撰 (1099年成)	● 59. 『宗山讀周易』方實孫 撰 (不明)
	16. 『易學辨惑』邵伯溫 撰 (不明)	● 60. 『周易傳義附錄 卷首圖說』董楷 撰 (1216年成)
	17. 『了齋易說』陳瓘 撰 (1131-1162年刊)	61. 『易學啓蒙通釋』胡方平 撰 (1289年刊)
●	18. 『吳園周易解』張根 撰 (1100-1126年成)	62. 『三易備遺』朱元昇 撰 (1270年成)
	19. 『周易新講義』耿南仲 撰 (1130-1161年成)	● 63. 『周易集說』俞琰 撰 (1311年刊)
●	20. 『紫巖易傳』張浚 撰 (1158年成)	64. 『讀易舉要』俞琰 撰 (不明)
	21. 『讀易詳說』李光 撰 (1140年成)	● 65. 『易象義』丁易東 撰 (不明)
	22. 『易小傳』沈該 撰 (不明)	66. 『易圖通變 易筮通變』雷思齊 撰 (不明)
●	23. 『漢上易傳卦圖・叢說』朱震 撰 (1134年成)	
	24. 『周易窺餘』鄭剛中 撰 (不明)	『續修四庫全書』所載文献
	25. 『易璇璣』吳沈 撰 (1146年成)	周～漢～魏晉代
	26. 『易變體義』都絮 撰 (不明)	67. 『馬王堆帛書經分傳釋文』廖名春 釋文 (不明)
●	27. 『周易經傳集解』林栗 撰 (1185年成)	68. 『周易鄭注』王應麟 輯 丁杰 後定 (不明)
	28. 『易原』程大昌 撰 (不明)	張惠言 訂正
	29. 『周易古占法』程迥 撰 (不明)	69. 『敦煌周易』王弼 注 (不明)
●	30. 『原本周易本義』朱熹 撰 (1265年刊)	70. 『關氏易傳』關朗 撰 趙蕘 注 (不明)
重	31. 『別本周易本義』朱熹 撰 成矩 編 (1265年刊)	唐代
●	32. 『郭氏傳家易說』郭雍 撰 (不明)	71. 『周易經典釋文』陸德明 撰 (738年成)
●	33. 『周易義海撮要』李衡 撰 (1160年成)	72. 『周易正義』孔穎達 撰 (653年以前成)
	34. 『南軒易說』張栻 撰 (不明)	73. 『周易注疏』王弼・韓康伯 注 孔穎達 疏 (653年以前成)
	35. 『復齋易說』趙彥肅 撰 (不明)	宋代
	36. 『楊子易傳』楊簡 撰 (不明)	● 74. 『易經解』朱長文 撰 (1094年成)
●	37. 『周易玩辭』項安世 述 (1202年成)	75. 『周易新講義』龔原 撰 (不明)
	38. 『趙氏易說』趙善普 撰 (1169年以降成)	76. 『晦庵先生校正周易繫辭精義』呂祖謙 編 (1169年成)
●	39. 『誠齋易傳』楊萬里 撰 (1254年刊)	77. 『古易音訓』呂祖謙 撰 宋咸熙 輯 (不明)
△	40. 『大易粹言』方闕一 編 (1213年刊)	78. 『泰軒易傳』李中正 撰 (不明)
		● 79. 『易經訓解』熊禾 訓解 (1643年刊)
		80. 『勿軒易學啓蒙圖傳通義』熊禾 述 (1353年刊)

- 1) 「天文」「地理」に関する注釈の認められる文献には●を、「形象」「幽明」等の関連カ所にのみ注のある場合には△を付した。また、該当カ所が重出する文献には「重」字を付した。
- 2) 文献の成立年を西暦にて記し、成立年が不明の場合、刊行年を付した。両者とも不明の場合「不明」とした。
- 3) 本表は宋代までに成立した文献を掲げている。そのため刊行年が宋代を下るものがある。
- 4) 文献の配列は『四庫全書』『續修四庫全書』の採録順に従う。そのため成立・刊行年が前後するものがある。

表2 唐・宋における「天文」「地理」定義一覧

定義の分類	時代	注釈者（生没年）	文献名（成立刊行年）	「天文」「地理」の定義
	唐	孔穎達（574-648）	『周易注疏』（653 以前成）	天体地形の形成する規則的な配列・構造
		李鼎祚（不明）	『周易集解』（不明）	認識可能な領域内の「気」の上下運動に伴って相対的に区分される現象の総称
構造説	北宋	故瑗（993-1059）	『周易口義』（不明）	天体地形の形成する規則的な配列・構造（孔穎達を踏襲、ただし「象」「形」については「気」の所在による相対的区分として李鼎祚の「天文」「地理」を踏襲）
		張根（不明）	『吳園易解』（1100-1126 成）	「気」の上昇下降によって形成される天体地形
		朱長文（1039-1098）	『易經解』（1094 成）	諸物の配列を記述する秩序としての位置関係
	南宋	張浚（1097-1164）	『紫巖易傳』（1158 成）	自発的な変化たる「象」「形」に付随する現象
		林栗（不明）	『周易經傳集解』（1185 成）	「象」「形」に付随する自発的現象
		李杞（1168-1220）	『用易詳解』（不明）	天体の運行・地形の動静の秩序
認識説	北宋	司馬光（1019-1086）	『温公易説』（不明）	「陰陽五行」により構成される認識可能な物質
		張載（1020-1077）	『横渠易説』（不明）	認識可能なほどに凝集した物質一般（気）
		蘇軾（1036-1101）	『東坡易傳』（1089 以前成）	唯一の実体たる宇宙全体への認識上の区分
	南宋	易祓（1156-1240）	『周易總義』（不明）	集合発散する現象変化に伴い生成する存在
表出説	南宋	朱震（1072-1138）	『漢上易傳』（1134 成）	究極原理を表出する「気」の集散現象の総称
		郭雍（1106-1187）	『郭氏傳家易説』（不明）	純粋な無形の原理「道」の表出する現象
		項安世（1129-1208）	『周易玩辭』（1202 成）	陰陽剛柔の原理の表出する現象
		楊萬里（1127-1206）	『誠齋易傳』（1254 刊）	「陰陽顯晦」の原理によって成立する現象
		馮椅（不明）	『厚齋易學』（不明）	「気」「形」として顕在した現象（朱震を引用）
		王宗傳（不明）	『童溪易傳』（不明）	「幽明の故」なる原理を表出する現象
		方實孫（不明）	『淙山讀周易』（不明）	普遍的対立としての「陰陽顯晦」の表出する現象
		丁易東（不明）	『易象義』（不明）	陰陽の原理と一体となって表出する現象
時空説	南宋	朱熹（1130-1200）	『周易本義』（1265 刊） （以下は朱熹説を補足）	観察者の認識中に内在し陰陽の原理を表出する無限の時間と空間（天文）・有限の空間（地理）
		朱鑑（不明）	『朱文公易説』（不明）	
		董楷（不明）	『周易傳義』（1216 成）	
		熊禾（不明）	『易經訓解』（1643 刊）	
		俞琰（不明）	『周易集説』（1311 刊）	

「天文」「地理」なる一対の概念に明白な注釈が与えられるのは、孔穎達の編纂した『周易注疏』（653 年以前成）が世に行われてからのこととなる。

『周易注疏』は、唐の太宗の命によって編纂された『五経正義』中の一書であり、『周易』の正統解釈、即ち「正義」であるために『周易正義』

とも呼ばれる。孔穎達は王弼及び韓康伯の手になる『周易注』に、より詳細な注解である「疏」を付加し、当時諸説紛々としていた『易経』の文意に一定の解釈を与えたのである。その「疏」は、「天文」「地理」について次のように説明する²⁾。

「仰ぎては以て天文を觀、俯しては以て地理を察る」という繫辭伝の文言の意味する所は以下の通りである。即ち、天空には天体が有り、その天体の規則的な配列が文様を形成している。それゆえ（その観察の対象となるものを）天「文」と呼ぶ。地表には山川あるいは原野沼沢が有り、その各々がやはり規則的な配列を有している。それゆえ（その観察の対象となるものを）地「理」と呼ぶ。また、それに続く、「このゆえに幽明の故を知る」という文言にある「故」とは、事物生成の故（原因）を意味する。易の原理を用いてこれら「天文」「地理」を観察するならば、無形の存在である「幽」、有形の存在である「明」、そして義理と事物生成の原因とを知ることが可能となる。」（表1文献番号6、四庫第7冊 pp527）

ここにおいて孔穎達は、「天文」「地理」を、単なる天体地形としてではなく、それら天体地形の規則的な配列によって形成される構造として定義する。更に、この構造の観察によって、天上地上の諸現象の成因も究明されるとする。孔穎達は星図に天体の配列として描かれた星座や、地図に地形の配列として描かれた図形のような文様を、天体や地形そのものとは異なる構造として抽象したのであろう、彼の「天文」「地理」は、天上地上の物体ではなく、そうした物体の位置関係のみを指す概念として定義されている。この孔穎達の定義は、最古の注釈というのみならず、物体間の関係を一概概念として扱い、物体そのものとは区別した点で画期的であった。また、顕在する構造の観察を潜在する諸現象の成因把握の手段とした点は現

代の実証主義にも通ずる思考であり、于（1990: 17）も「孔穎達の解釈を見るに、“地理”の概念は地表の形態を言うばかりではない…それはまた“幽明の故を知る”ものである。地理概念の形成は、知識の集約と法則化を促したのである」と述べ、これを「中国地理学史上の一大進歩」と評している。

孔穎達以後、唐代にあって「天文」「地理」について異説を残した学者として挙げられるのが、『周易集解』（成立年不明）の著者、李鼎祚（生没年不詳）である。『周易集解』は、漢代の学者を中心としながら孔穎達に至るまでの諸家の説を折衷したものであり、王弼・韓康伯の『周易注』の興隆以降衰微した漢易を伝える古典である。漢易とは字の如く漢代の易学を指しており、「象数易」と呼ばれる神秘的にして数学的な解釈を特徴とし、王弼らの倫理的な色彩の強い「義理易」とは性質を異にする。そして漢易の集成たる『周易集解』は、「天文」「地理」についても漢の荀爽（生没年不詳）の注を引き、王弼に基づく孔穎達とは異質の論を展開する³⁾。

「荀爽は言う。陰なるものが上昇し、陽なるものへと変化することによって天の文が形成され、陽なるものが下降し、陰なるものへと変化することによって地の理が形成される。」（表1文献番号7、四庫第7冊 pp813）

文中の「陰」「陽」は中国哲学において形而下の存在一般あるいは物質一般を表す「気」の二元対立的な性質区分である。「陰陽」は中国哲学における主要概念として様々に議論されており、その意味は時代によっても論者によっても一定しないために正解を与えることはできない。しかし一般に「陰」は重濁、凝集、潜在、静止といった性質を、「陽」は軽清、発散、顕在、活動といった性質を含意し、この注釈においても、「天文」は重濁なる陰気が上昇して形成されるもの、「地理」

は軽清なる陽気が下降して形成されるものとして理解されている。李鼎祚の解釈の新奇な点は、その両者が上昇と下降という単なる位置の転換によって相互に変換されるという所にある。李鼎祚においては、「陰」も「陽」も、したがって「地理」も「天文」も、相反する概念ではなく、同一実体の様態に過ぎない。それは、空中の「気」たる水蒸気が凍てつき降雨しつつには地上に河川や海洋を生むがごときを「地理」と呼び、また地上に流れ出た水が日光に暖められては上昇し、再び雲となるがごときを「天文」と呼ぶようなものである。「陰」「陽」の変化とは、ここでは水が蒸発した凝結するその様に該当し、その水の運動によって形成される行雲や流水を「天文」「地理」と呼ぶのである。李鼎祚においては、この「陰」と「陽」の変化は水に限らずあらゆる物質存在に適應される。つまり、ここでの「天文」「地理」は、あらゆる種類の物質を内包する概念なのである。かくして、李鼎祚の「天文」「地理」は、物質一般を指す「気」の上下運動に随伴して変化形成する現象の総称と定義される。

また、李鼎祚は「幽明」についても荀爽の説を引用する⁴⁾。

「荀爽は言う。「幽」とは天の上、あるいは地の下にある知覚不能の存在である。…「明」とは視覚や聴覚によって明確に認識される、天と地の間の萬物である。」(表1文献番号7, 四庫第7冊 pp813)

李鼎祚は、「幽明」を知覚の可不可による現象の区分として解釈する。これを「天文」「地理」の観察を通して「幽明之故」が知られるとする『繫辞上傳』の本文および上記の注釈と合わせてみれば、李鼎祚は、知覚の及ぶ「明」の範囲において物質の運動変化により生成される諸現象こそが「天文」「地理」であり、それらの観察によって、知覚の及ばない「幽」の領域にも通底する原理、

即ち「幽明之故」を把握し得る、と述べていることがわかる。つまり、李鼎祚の「天文」「地理」は、知覚可能である天地間の諸物を、その流動する方向によって区分した、観測者の認識に依拠する相対概念なのである。知覚可能な領域において何か上昇すれば「天文」へと変じ、下降すれば「地理」と化す、と観測者は認識する。一見多様な現象の集合に見える「天文」「地理」は、実際には一つの「気」という実体に観測者が与えた相対的な区分に過ぎない、とする一種の認識論こそが、李鼎祚の伝える説の本質である。

以上が唐代の「天文」「地理」についての注解である。明確な注の残されたものとしては、孔穎達の『周易注疏(正義)』と李鼎祚の『周易集解』の二書に限られるものの、その二書の中には「天文」「地理」を天上地上の諸物の織り成す構造とする孔穎達と、諸物の位置の相対的転換への認識に還元する李鼎祚という、さながら実在論と認識論のごとき対照を発見することができる。

Ⅲ 宋代における「天文」「地理」概念の変遷

宋(960-1279)は中国史上において特筆すべき学術の進展が見られた王朝であり、隣国金に首都開封を奪取される以前の北宋(960-1126)、以降の南宋(1127-1279)を通じて「道学」「理学」あるいは「宋学」と称される思弁的な儒学を生み出した。特に、『易経』は、哲学上の中心概念たる「太極」や「陰陽」の典拠として、常に議論の俎上にあつた。そのため、この時代に著された『易経』注釈書の数もそれ以前に比して多く、注釈の内容も複雑である。そしてそれは、「天文」「地理」概念についても例外ではない。

本章では、多様な宋代の「天文」「地理」概念を体系的に把握するため、両概念の定義に基づき、次のように分類した。即ち、「天文」「地理」を(1)諸物の関係より成る構造とする「構造説」

(2) 観測者の認識の所産とする「認識説」(3) 形而上の原理の現象への表出とする「表出説」(4) 有限・無限の別のある時間・空間概念として定義する「時空説」の四者である。以下、この四分類に従い、各々の注釈が宋代を通じてどのように変遷したのかを詳述する。

1. 「構造説」の抽象化

唐代の注解が宋代の学者に継承される際、第一に行われたのは旧説の直接的な引用であった。宋易の端緒（今井、1958:104）として評価される故瑗（993-1059）の『周易口義』（成立年不明）も、孔穎達の『周易正義（注疏）』を敷衍する形で自説を述べている⁵⁾。

「『周易正義』によれば、天文とは太陽や月や星といった天体が天空に配置され、それによって形成される規則的な文様を指す。それゆえに「文」と呼ぶ。地理とは山地に河川、原野沼沢、高所低所に規則的な配列が認められ、地上に横溢していることを指す。それゆえに「理」と呼ぶ。」（表1文献番号11、四庫第8冊pp462-463）

この注は「義曰（『周易正義』によれば）」という発語からも明らかのように、孔穎達の説を踏襲するもので、若干の字句を除いてはほぼ同文であり、当然文意も一致する。それでは故瑗の注釈には独創は見られないのかといえそうではない。ここで注意すべきはむしろ、「象」「形」に対する解釈である⁶⁾。故瑗は『周易正義』に引かれる韓康伯の注について次のように記す。

「『周易正義』には「象とは日月星辰の類、形とは山川草木の類である。」とある。そもそも天は剛陽の性質を示す気が上方に位置して物質を生じるもので、地は柔陰の性質を示す気が下方にあって天の作用を受容して同様に物質生成を行うものである。（したがって諸物の構成要素たる気が）天にあれば（天体たる）象となり、

地にあっては（地形たる）形となる。これは天地共通の法則、物質生成の原理であって、あらゆるものはただそのようになる。」（表1文献番号11、四庫第8冊pp452）

要するに、「象」とは天空に上昇する「気」より成る物質であり、「形」とは地表に下降した「気」より成る物質であると言うのである。これは「象」「形」を、「気」の所在による相対的な区分として定義するもので、李鼎祚の「天文」「地理」の定義と酷似する。つまり、故瑗は孔穎達の注釈を基礎としながらも、「象」「形」の概念に対しては李鼎祚の「天文」「地理」説における認識論を転用することによって、唐代より伝わる二説の結合を図ったのである。ここに、天体地形を構成する物質的な「気」こそが李鼎祚の言う「天文」「地理」であって、孔穎達はそれらの織り成す構造を「天文」「地理」と説明した、という解釈が生まれた。

故瑗のように、従来の説を「天文」「地理」および「象」「形」の注釈に分割して採用した儒者に、北宋後期の張根（生没年不詳）がある。張根は『吳園易解』（1100-1126年成）において「天文」「地理」を日月山川のような天体地形とみなし、「象」「形」についても、「象」を天体、「形」を地形に当て、「天文」「地理」と同義の語とする⁷⁾。

「（天文とは）日月がそれである。（地理とは）山川がそれである。（幽明之故を知るとは）日月に代表される「象」を観察して天の明なることを知ること、山川のような「形」を観察して地の幽なることを知ることのいずれもが可能であることを言う」（表1文献番号18、四庫第9冊pp540）

そして、「象」「形」については、

「陽気は軽清であるがゆえに上昇して「象」となる。陰気は重濁であるがゆえに下降して「形」となる。」（表1文献番号18、四庫第9冊pp537）と、李鼎祚の「天文」「地理」に見られた「気」

の所在による区分を当てはめる⁸⁾。ただし、張根の解釈は結局の所、軽い「陽気」の上昇から天体である「象」「天文」が、重い「陰気」の下降から「形」「地理」が、それぞれ生成されるといったもので、李鼎祚の「天文」「地理」区分の根拠を認識に求める理解と異なるばかりか、孔穎達に見られた構造と秩序の抽出さえみられない。張根の説は故瑗に比しても簡略であり、唐代の説の抽象化を含む、「地理」の語義の変遷が確認できる一例である。

このように、概念定義に用いる要素を減少させる傾向は、孔穎達の構造説に近い立場を取る注釈者の間に顕著に認められる。北宋の朱長文(1039-1098)の『易経解』(1094年成)はその一例である⁹⁾。

「天を文と言うのは(「天文」が一概念として独立しているのは)経緯度数(天球上の緯度経度等)が明確に示されるからである。…地を理と言うのは(「地理」が一概念として独立しているのは)高下原委(土地の高低、河川の上流下流等)の関係が分明だからである。」(表1文献番号74、續修第1冊pp578)

朱長文は「天文」「地理」を、孔穎達同様、天上地上の諸物の位置関係として定義する。しかし、諸天体の天球中の経度緯度を「天文」とし、また土地の標高や水流の始点終点を「地理」とする朱長文の解釈は、諸物の配列というよりも、その配列を配列たらしめる秩序としての位置関係を本質としている。つまり、孔穎達では天上地上の諸物の存在こそが構造の成因として前提されていたが、朱長文においては実際には物体が見られずとも、各点の経緯度や標高といった位置の指示さえあれば、そこに秩序と構造を認め、これを「天文」「地理」と呼ぶのである。

南宋の張浚(1097-1164)の『紫巖易傳』(1158年成)に残る「天文」「地理」はさらに抽象の度

を高める。張浚は、

「天に在りては象を成す」ものには「自然の文」が、「地に在りては形を成す」ものには「自然の理」が付随する。」(表1文献番号20、四庫第10冊pp201)

と「天文」は「象」に、「地理」は「形」に、それぞれ「自然」、つまりおのずから付随するものとして簡潔に記し¹⁰⁾、「象」「形」についても、

「(「天文」「地理」に対する)観察の後に、乾坤(天地の本質)も明らかになる。…天地の間の^{あらわれ}形象には「自然の変化」(おのずから生じる変化)がある。」(表1文献番号20、四庫第10冊pp198)

と、「自然」に変化する現象と述べる¹¹⁾。張浚の注釈は余りに短く、それぞれの定義も明瞭ではないが、「天文」「地理」ばかりではなく「象」「形」をも変化して已まぬ現象と見做し、それらを天体地形あるいは日月山川といった具体的な存在を前提せず、単に「自然の文」「自然の理」「自然の変化」とする点で、諸物の配列や位置関係を「天文」「地理」の成因と論じた孔穎達や朱長文以上に抽象的である。

同様の説は南宋の林栗(生没年不詳)の注する所でもある。その著『周易経傳集解』(1185年成)には、

「天に在りては象と成」るものに「自然の文」の付随しないものではなく、「地に在りては形と成」るものに「自然の理」の付随しないものはない。」(表1文献番号27、四庫第12冊pp445)

と、張浚と同工の文言が残る¹²⁾。

南宋後期の李杞(1168-1220)も、「自然の文」「自然の理」を注釈に用いている。彼は、『用易詳解』(成立年不明)において

「天を仰ぎ観て日月星辰の運行に「自然の文」があることを、地を俯し察て山岳河川の動靜に「自然の理」があることを、つまりは「幽明

の故」を認識することが可能となるのである。」
 (表1文献番号58, 四庫第19冊pp530)
 と注し、「自然の文」たる「天文」, 「自然の理」
 たる「地理」を, 日月星辰の運行や山岳の静止と
 河川の運動の内に見出される秩序としており, この
 「自然」の「文」「理」を「幽明の故」と同一視する¹³⁾。
 李杞の解は具体的な物体を前提とする点では孔穎達
 に近く, 物体の配列より秩序を取る点では朱長文に
 類する。そして, 諸物の位置ではなく運動の中に
 秩序を認める点は両者にも似ず創的である。李杞
 は, それまでに「自然」の一語によって極端に抽象
 化された「天文」「地理」を旧来の構造説に近接
 させながらも, 自然の変化という着想を諸物の運
 動の中の秩序として保存したのである。かくして,
 李杞の「天文」「地理」は諸物の配列のように確
 然と図示されるようなものではなく, 孔穎達がそ
 うした「構造」の観察によって究明し得るとした
 「幽明の故」までも含む広範な秩序として定義
 されている。

以上が, 「構造説」に分類される注釈である。「
 構造説」は宋代の「天文」「地理」概念の内, 最
 初期に成立し, 次第に「構造」とその前提となる
 物体との分離が行われた。そのため, 漸次抽象化
 を深めるという変遷を辿ったと概括し得るであら
 う。一方で, この抽象化には, 構造は「自然」に,
 つまりおのずから生じるという発想が組み込まれ,
 諸物の配列のみならず, その秩序や運動にまで,
 物体に依存しない構造としての性質が想定されて
 いる。それは「構造」が一実在として独立する過
 程であったとも言い得るであろう。

2. 「認識説」の一般化

上記の「構造説」が唐の孔穎達の実在論的傾向
 に類似するのに対して, 北宋の司馬光 (1019-
 1086), 張載 (1020-1077), 蘇軾 (1036-1101) らは,
 陰陽の「気」の運動と認識論とを基調とする, 唐

の李鼎祚に通ずる解釈を生み出した。この三家は
 それぞれ『資治通鑑』(1084年成)『正蒙』(1076
 年成)『赤壁賦』(1082年成)等の著作を残し,
 政治上の事績や書画の才によっても知られる。各
 人の手による『易経』の注釈は, 同時代の程頤
 (1033-1107)の『伊川易傳』(1099年成)¹⁴⁾(表1
 文献番号15, 四庫第9冊)とともに北宋を代表す
 るものである。まず, 司馬光は『温公易説』(成
 立年不明)において, 次のような注を施す¹⁵⁾。

「天文」「地理」はいずれも陰陽五行と分離で
 きない。この認識可能な部分を以て認識不能の
 存在を推量することによって, 幽明の原理が
 唯一であることが理解される。」(表1文献番号
 12, 四庫第8冊pp632)

また, 「象」「形」については, 次の通りである¹⁶⁾。

「象」には認識不能のものと認識可能のものが,
 「形」には消滅するものと生成するものがある。」
 (表1文献番号12, 四庫第8冊pp630)

司馬光の注釈はやや難解であるが, まず, 「象」
 「形」を天体地形とは関連付けず, 認識の可不可,
 消滅と生成という諸存在の区分の内在を説く。そ
 して「天文」「地理」については認識可能の存在
 であり, 認識不能の存在についても「天文」「地理」
 を介しての推量が可能であるとする。ここから認
 識の可能なものと不能なものを含む「象」の全
 貌は「天文」「地理」の観察によって明らかになり,
 ここに「幽明」の原理が一貫することも知られる。

また, 司馬光における「天文」「地理」は「陰
 陽五行」と不可分の存在である。なお, ここでい
 う「陰陽五行」とは「陰陽」に「水火木金土」の
 「五行」を加えたものである。「五行」は「陰陽」
 とともに一様の解釈を拒む概念ではあるものの,
 宋代の代表的な理解によれば形而下の存在全般を
 構成する要素あるいは元素であり, いずれも形而
 上の原理たる「太極」より生ずるとされる¹⁷⁾。司
 馬光は「陰陽五行」に定義を与えていないために

その概念内容は不明であるが、「陰陽」と「五行」が併記され一概念のごとく記されている所をみれば、「天文」「地理」が「陰陽五行」を要素として共有する形而下の存在であり、物質一般（すなわち「気」と区別されない）と解するのが妥当であろう。したがって、司馬光における「天文」「地理」は、「陰陽五行」により構成される物質であり、特に認識不能の存在の推量に必要な、認識可能な物質を指す概念となる。

司馬光の解釈は、認識可能な「明」なる天地の間の諸物を「天文」「地理」とみなす李鼎祚の説に近似し、諸物の配列や構造として定義を下す孔穎達の説とは異質である。特に、「天文」と「地理」とを同一と見、その間に何らの区別も設けないという点において顕著な差異があり、あくまでも天体と地形とを実体とし、張浚や林栗における極端な抽象化の後なお「自然の文」と「自然の理」との別が残存する「構造説」とは好対照を為す。また、「天文」「地理」の実体をただ「陰陽五行」として説明を加えぬ司馬光の表現も、やはり「天文」「地理」を単に物質一般たる「気」の上下運動による変化とみなし、その物質一般についてはただ「陰陽」とのみ記す李鼎祚の見解を髣髴とさせる。そして、この「陰陽」や「陰陽五行」とのみ表現された不明瞭な「天文」「地理」の実体は、以降様々に議論されることになる。

この実体についての関心は、既に張載の『横渠易説』（成立年不明）に認められる。主著『正蒙』において「太虚」なる無形概念を「気」の本体とし、あらゆる現象を気の集散による変化とする一元論に基づく宇宙論を提唱した¹⁸⁾張載は、同様の論に基づき、「天文」「地理」を認識可能な現象全般として定義している¹⁹⁾。

「天文」「地理」とは、皆「明」なるがゆえに認識される存在であり、認識されない「明」に非ざるものは皆「幽」である。これが「幽明の

故を知る」所以である。全ての存在は離（八卦の一、☲。火を象り明瞭なる性質を表す）、即ち明瞭なる所に現れ、そうでなければ現れない。ある存在が現れるということは（その存在が認識可能であるほどに）明瞭であるがゆえのことであり、いかなる存在も認識されないとしても、何も存在しないということにはならない。そしてこれこそが宇宙の全体である。」（表1文献番号13、四庫第8冊 pp731）

この箇所では、「天文」「地理」は宇宙全体の内、認識可能な部分の総称として説明されている。彼は真空や虚無といったいかなるものも存在しない領域を否定し、存在の有無を認識の可不可に置き換え、無と思しきものは実は認識から外れているに過ぎないとするのである。そして、これに続く箇所で「天文」「地理」と一元的な実体である「気」との関係が述べられる²⁰⁾。

「気が凝集すれば明瞭なる性質を得、有形の存在となる。気が凝集しなければ明瞭なる性質を失い、無形の存在となる。それは凝集する、どうして有と言えないことがあろう。それは拡散する、どうして無と判断できよう。だからこそ（『繫辭上傳』の著者たる）聖人（孔子）は、「天文」「地理」の観察によってただ「幽明」の故を知ると言い、「有無」の故を知るなどとは言わなかったのだ。」（表1文献番号13、四庫第8冊 pp731）

彼はつまり、「気」が認識可能であるほどに集合した場合、それは認識可能な部分たる「天文」「地理」の条件を満たすと言うのである。そのため、この宇宙に存在する認識可能な全てのものは、均しく「天文」「地理」と呼ばれることになる。即ち、「天文」「地理」とは認識の範囲内にある「気」に過ぎないのである。なお、この張載の注においては、「天文」「地理」はいずれも認識可能な「気」、つまりは物質一般としてのみ定義さ

れ、両者は区別されず同一の概念とされる。したがって、張載こそが、李鼎祚より既に区別の曖昧であった「天文」と「地理」を、同一の概念であると初めて確言した儒者となる。

蘇軾の『東坡易傳』（1089年以前成）も、「天文」「地理」の実体について一元論を採用する。蘇軾は「天文」「地理」について、

「これ（「天文」「地理」）については「形象」「変化」（に関する注釈）と同一である」（表1文献番号14、四庫第9冊pp123）

とし、「象」「形」と同義の概念と見る²¹⁾。それではその「象」「形」はどのように定義されるのであろう。蘇軾はこれについて、司馬光と張載が共に「天文」「地理」理解の核心として扱った認識論をより広範に適用し、次のように説明する²²⁾。

「天地は一物であり、陰陽は一気である。それを「象」とするも「形」とするも、単にその所在が異なるばかりである。それゆえ、「天に在りては象となり、地に在りては形となる」という経文にある）「在」という字は、その「在」る所のものが同一であることを明示している。「象」とは「形」の精華であり発散して上昇するもの、「形」とは「象」の体質であり滞留して下降するものである。つまり「象」と「形」とは、観察者が己の上下に物質があるのを速断して二分し、それが唯一の実体であることを悟らなかったために生まれた概念に過ぎない。そう考えれば、世に言う変化は、ことごとく一者があるその所在により二分されることから出発したものであって、要するに観察者の認識から生まれるものなのである。それ以上の区分は無限にあるが皆同様である。だからこそ、『易経』には「天に在るものが象となり、地にあるものが形となる、それが變化の始まりである」と書かれている。」（表1文献番号14、四庫第9冊pp120）

蘇軾は「天文」「地理」あるいは「象」「形」を同一視するどころか、天地陰陽、すなわち広大な宇宙全体から微細な物質の一片までを同一かつ唯一の実体とみなして、あらゆる実体の区別や変化を観察者の主観に帰する注釈を展開する。蘇軾の「象」「形」の定義は李鼎祚の「天文」「地理」に通ずる上昇下降の論でありながら、彼は「象」「形」そして「天文」「地理」は恣意的な認識上の区分に過ぎず、その実体は、つまるところ唯一なる全世界・全物質そのものにほかならないと言うのである。それは万物の成因を認識に帰す極端な認識論ということができるであろう。

以上の三者は北宋期の「認識説」の提唱者であり、司馬光は「認識可能な物質」、張載は「認識可能なほどに凝集した物質一般（気）」、蘇軾は「唯一の実体たる宇宙全体への認識上の区分」として、「天文」「地理」を定義している。これらの解釈は、李鼎祚の注に通底する認識論を核として有し、曖昧さを残していた「天文」「地理」の実体について、「気」という唯一の実体の運動によって万物が成立するという一元論を用いて補足する。この三者の「認識説」においては、「天文」「地理」は互いに区別されないばかりか、実体としては他のあらゆる存在と同一であって、観察者の認識を経てのみ成立する概念と論じられる。

しかしながら、宋代においてこの種の「認識説」に該当する注釈は上記の三家を除き認められない。比較的近い立場を取る南宋の易祚（1156-1240）は、その著『周易總義』（成立年不明）に次のような注釈を残す²³⁾。

「天に在りては象となる」ような「文」を、また「地に在りては形となる」ような「理」を観察すれば、「幽明の故」を知ることができる。…あらゆる存在は天地より生まれ、それが凝集すれば精密なる物質が形状を有し、拡散すれば浮薄なる物質がなお変化を続ける。」（表1文献

番号47. 四庫第17冊 pp588)

その文意は必ずしも明瞭でないが、「天文」と「象」および「地理」と「形」の同一視、万物が天地から流出するという一元論、集合と発散による物質の生成変化の説明という三点を鑑みるに、易祓の説は張載の理解に似る。ところが、易祓は認識を重視しておらず、そこには、北宋の三家の有していた、諸存在を同一実体に帰する一般化の傾向のみが残存している。

以上が「認識説」に該当する注釈である。「認識説」は、北宋初期の同一時期に現れた傾向である。「構造説」が抽象化に傾いたのに対して、「認識説」には一元論への一般化が共有されている。これらの注釈では、「天文」「地理」概念の根拠を観察者の認識に置くために、その実体としての区別は失われる。注釈の中では「天文」「地理」は同一の概念として扱われ、ついには実在全てが「天文」「地理」であるとの解釈も生まれてしまう。このような一般化こそが、「認識説」変遷の特徴である。

3. 「表出説」の出現

南宋に至ると、「天文」「地理」を、「構造説」のように実在間の関係ともみなさず、「認識説」のように認識の所産とも考えない解釈が現れる。その発端となるのが、北宋後期から南宋初期にかけて活躍した朱震（1072-1138）である。彼は昏迷を極める南北両宋の交替期の重臣にして、北宋以降も依然として軽視されていた象数易（Ⅱを参照）を称揚した易学者であった。そのため、その著『漢上易傳』（1134年成）に見える「天文」「地理」解釈も象数易の用語が加わっている。それは以下のように一見難渋な表現を伴う²⁴⁾。

「(一般に) 天は気であり、「文」を成す。地は形であり、「理」を伴う。形が散逸して気となれば、それは「明」から「幽」への移行で

ある。気が凝集して形を成すならば、それは「幽」が「明」への移行である。(そうであるから、「天文」「地理」という表現があることに反して) 天地の観察によって、凡そ「地に在りては形と成る」と言われる存在(上文の「形」)も、ことごとく(天に在るべき)「文」を有し、同様に「天に在りては象と成る」と言われる存在(上文の「気」)も、ことごとく(地にあるべき)「理」を具えることが明らかになるのである。それゆえに、(易の占法において、筮竹を)二分し、それを四本ごとに数え、陰陽の二儀、それに老少の別を加える四象、更に二分を加えた、陰陽の三組($2^3 = 8$)である乾兌離震巽坎艮坤の八卦、その八卦を二つ組み合わせた六十四卦($2^6 = 64$)の内にある陰陽たる三百八十四爻($2^6 \times 6 = 384$)という『易経』を構成する象徴の生成、そしてそれらを導き出すのに必要である筮竹の本数である一万一千五百二十策についても、皆、太極を根源とすることが理解される。これを知ることが「幽明の故を知る」ことである。」(表1文献番号23, 四庫第11冊 pp227)

朱震の文章はやや迂遠であり、そこに『易経』特有の語彙が入り乱れることで殊更に難解な印象を受ける。しかし、その大意自体は明快である。即ち、「天文」「地理」はそれぞれ一般に天地に属するものとされるが、実際には「気」(およびその凝集したものとしての「形」)の集散変化という宇宙全体に遍在する現象であり、地上にも「天文」が、天上にも「地理」が見出されるというのである。また、複雑な現実世界の成因を「気」の集散に還元するために、その集散変化を制御する原理の存在も予想される。朱震は、「天文」「地理」を『易経』において萬物を象徴する無数の卦爻に相当する実在とし、それが全存在を規定する唯一究極の原理である「太極」から生ずるものとする。

つまり、「天文」「地理」とは、究極原理に統御され、それゆえに原理自体がその内に現象として表出するような物質存在である「気」の集散を総称した概念なのである。

この朱震の説は、「気」の集散による一元論である所を見ると張載の同系と言えるが、認識の現象成立への寄与はそれほど強調されない。しかしながら、朱震における「天文」「地理」が元来認識不能の原理である「太極」の認識可能な現象への表出であることを考慮すれば、この解釈も北宋の「認識説」に共通する「認識可能な存在の総体」という性質を有することになる。このように、朱震に始まる「表出説」においては、認識の及ばない形而上の原理の表出する認識可能な現象として「天文」「地理」が理解されるのである。

しかし、朱震に先んじて万物の生成を「気」の集散によって説いた張載は、「天文」「地理」を気が認識可能なほどに凝縮したものと定義し、別に認識不能の「気」の存在も認めていた。それでは、「気」の全てを認識可能な「天文」「地理」と定義する朱震は、その集合と散逸とをいかに区別していたのであろうか。

この点は「象」「形」についての注を見れば明らかになる²⁵⁾。

「天に在りては象と成る」ものとは陰陽であり、「地に在りては形と成る」ものとは剛柔である。天が変じるならば地も化す。変化とは陰陽が極まって互いに変ずるものである。陰陽の気は上方において、剛柔の形は下方において変化する。」(表1文献番号23, 四庫第11冊 pp224)

ここで「象」「形」は、「陰陽」と「剛柔」とに分類されており、上記の注にみられた集散による区分「気」と「形」に相当する。ところが、「陰陽」「剛柔」の区別は、上方下方いずれに位置するのかに従って生ずるものとされる。そして、ここでいう

変化とは(前文の引用の通り)「気」の集散現象そのものであるから「天文」「地理」に異ならず、したがって「陰陽」「剛柔」はその集散する所の「気」であることになる。そうであれば、朱震にとっての「気」の集散とは、李鼎祚を想起させるような上昇下降であり、ここに「天文」「地理」の別も生まれる。朱震は、「気」の上昇下降という現象を、それぞれ「天文」「地理」と定義しながら、そこに原理の表出を見出したのである。

「天文」「地理」を原理の表出する現象とみる説は、朱震にやや遅れる郭雍(1106-1187)の『郭氏傳家易説』(成立年不明)にも認められる。郭雍はまず、「天地」「乾坤」について次のような注を付す²⁶⁾。

「無形の存在は「道」であり、有形の存在は「物」である。そして、「乾坤」は「道」であり、「天地」は「物」である。それゆえに、「道」は「乾坤」を内包して「天地」を含まない概念であり、「物」は「天地」を内包して「乾坤」を含まない概念である。」(表1文献番号32, 四庫第13冊 pp214)

彼は、「天地」を「物」、すなわち有形の物質と捉え、「乾坤」を「道」、すなわち無形の原理と見る。なお、この「乾坤」は、『易経』における純陽、純陰の卦を示す語であり、通例「天地」の本質や性質を抽象した概念と考えられている。世界全体の実体が「天地」であるとすれば、世界の本質や性質が「乾坤」である。彼はこれを踏まえ、「象」「形」を次のように解釈する²⁷⁾。

「天に在りては象と成る」ところの諸物を介して、(原理である)「道」の一半たる「乾」の変化が表出し、「地に在りては形と成る」ところの諸物を介して、やはり「道」の一半たる「坤」の変化が表出する。」(表1文献番号32, 四庫第13冊 pp215-216)

ここで彼は、「象」「形」を原理の動静を映す鏡の

如く捉えている。無形の原理は有形の諸物体を通して現象世界に表出するとみなすのである。そして「天文」「地理」については次のよう注する²⁸⁾。「『易経』の方法を用いて（「天文」「地理」に対する）観察を行えば、「物」たる「天地」「幽明」の成因も悉く知られる。ここでの「幽」とは「天地」の（背後にある原理たる）「道」の潜在を意味し、「明」とは（「道」という）原理の顕在を意味する。」（表1文献番号32，四庫第13冊 pp220）

つまり、郭雍は観察の対象とされる「明」にあたる「天文」「地理」を、諸物を統括する原理「道」が現象として表出し、認識可能となったものと定義するのである。このように郭雍も原理の表出としての現象を「天文」「地理」と解釈するのではあるが、朱震とは異なり「天文」と「地理」との間に区別はなく、この二概念と「象」「形」との相違さへ希薄である。また、「天文」「地理」がいかなる現象なのかという説明もなされない。郭雍にとっての「天文」「地理」は、純粹無形の原理「道」の表出である。「道」が顕在した「明」なるものこそが「天文」「地理」であり、この両者の観察を介して、未だ潜在する「幽」なる「道」の把握も可能であると説くのである。

これから少し遅れる、項安世（1129-1208）の『周易玩辭』（1202年成）も、認識の可不可を条件に容れぬ表出説を説く。そこでの「天文」「地理」は、『易経』の原理に通ずるものとして、万物把握の方法たる「易」の成立に関する伝承とともに説明されている²⁹⁾。

「上古の昔、（伝説上の帝王である）伏羲が『易経』の根本部分である八卦を作成したと伝えられるが、それは天を仰ぎ観て、「陰陽の象」を明らかにし、地を俯し察て、「剛柔の形」を明らかにすることから始まった。伏羲はここで三組で八卦を構成する、陰陽を表す「爻」（二進

法記号）を制定し、それを万物の性質を悉く類型化し得るような、つまりは「天文」「地理」から人事その他雑多な事象に至るまでに一貫するような、更には「幽明の故」をも把握できるような、万能の象徴として用いたのである。」（表1文献番号37，四庫第14冊 pp402）

ここに見える「天を仰ぎ観」「地を俯し察」という二句は、序にあるごとく、『易経』『繫辭上傳』本文においては「天文」「地理」の観察を意味している。項安世は、伏羲がこの観察によって「陰陽の象」と「剛柔の形」とを明らかにしたと述べる。つまり、「陰陽の象」「剛柔の形」は、それぞれ「天文」「地理」と相同の概念とみなされているのである。そして、「陰陽の象」「剛柔の形」という文言は、陰と陽、剛と柔なる対立を本質とする原理の表出としての「象」「形」を名状したものである。このことは「象」「形」に関する注解に詳しく記される³⁰⁾。

「天に在りては象となる」とは、雷や風雨、日月の運行や寒暑の交替等の対立的な天候現象が、皆、原理の往来であることをいい、「地に在りては形となる」とは、生物の雌雄の別や、諸物の空虚と充滿あるいは所在の高低など、性質や関係の対立が、やはり皆、原理の感応であることをいう。」（表1文献番号37，四庫第14冊 pp400）

項安世によれば、「象」「形」とは、天上地上の諸物において、「陰」と「陽」、「剛」と「柔」という根本的な二項対立が表出することとなる。そしてこの二項対立を、項安世は原理の感応と呼び、普遍的な原理と規定するのである。したがって、彼における「象」「形」そしてそれと同義とされる「天文」「地理」は、普遍的な原理が表出する所の現象なのである。更に、彼はこの普遍的な原理を二項対立そのものと解することによって、伏羲が「爻」という万物に一貫する二進法記号³¹⁾

を完成させることができたのも、「天文」「地理」の観察によって普遍的な原理を見出し得たからである、と結論した。このように項安世は、朱震や郭雍に通ずる、原理の表出として「天文」「地理」を解釈する立場を取りながらも、その原理を、「陰・陽」「剛・柔」という二項対立を本質とする、いわば差異の原理であるとする。また、項安世においては「天文」「地理」はあらゆる現象とみなされる訳ではなく、あくまでも日月寒暑、虚実高下等の二項対立的関係が明らかな、「陰・陽」「剛・柔」の原理の存在を開示する現象に限られている。

項安世と同時代を生きた、高名な詩人でもある楊萬里(1127-1206)も「天文」「地理」を判明な原理の表出として描き出す儒者の一人である。彼の『誠齋易傳』(1254年刊)は次のように記す³²⁾。「仰ぎては天文を觀、俯しては地理を察る、この故に幽明の故を知る」とは何を意味するか。これは聖人が天地の陰陽顯晦(陰と陽、あらわれることとかくれること)の原理を知ることによって、その「幽明」の事実をも理解することである。…「天文」は顯現している。しかしその「文」の運行の原因は認識できない。「地理」も顯現している。しかしその「理」の規定の原因は認識できない。この(運行と規定の)原因こそが「幽」である。一方で天地の「文理」は認識できる。これが「明」である。いかなる存在がこれを運行し規定するのであろうか(それは先に言う「陰陽顯晦の原理」に他ならない)。(表1文献番号39、四庫第14冊pp721)その文中には、認識可能な現象としての「天文」「地理」と、それを現象たらしめる原因としての「陰陽顯晦」の原理との関係が説明されている。楊萬里は、「天文」「地理」という現象を成立させる原因として、「陰陽顯晦」なる認識不能の原理を想定した。この原理は、項安世の説くような陰

陽の対立に加えて、顯晦すなわち認識の可不可をも規定するものとされる。この原理は、諸物に対立的性質を備えさせるとともに、それらを認識可能とすることによって、「天文」「地理」と呼ばれる現象群を運行するのである。こうした楊萬里の解釈は、現象を成立させる原理への強い関心をうかがわせるものである。彼の注には認識の可不可が再三述べられるが、これも原理と現象の関係を主眼に置くもので、北宋期の「認識説」のように認識論に基づき「天文」「地理」を含む諸存在を一者に帰するような意図はない。それは「象」「形」に関する注にも表れており、

「知覚可能にして接触不能のものを「象」と言い、知覚も接触も可能なものを「形」と言う。日月は天に存在する「象」であり、山沢は地に存在する「形」である」(表1文献番号39、四庫第14冊pp715)

と、両者を知覚と接触という実際的な基準によって区別している³³⁾。

南宋後期に至ると、これら「表出説」の祖述者も現れる。馮椅(生没年不詳)は『厚齋易學』(成立年不明)に朱震の説を引き次のように論ずる³⁴⁾。

「(天)文」とは「氣」の表面化した状態であり、日月星雲等の「象」の類である。「(地)理」とは「形」の完成した状態であり、高所と低所あるいは河川や丘陵の類を意味している。「(天)文」は「明」であり、「(地)理」は「幽」である。朱震は、上方を仰いで『易經』の原理を用いて天を觀察すると、凡そ地上の「形」を成すものは皆(天にあるべき)「文」を有しており、下方に俯して『易經』の原理を用いて地を觀察しても、やはり天の「象」を成すものは皆(地にあるべき)「理」を有していることが分かる、と言っている。とすれば、「幽」「明」は同一の概念なのである。「幽」は「明」の「理」であり、「明」は「幽」の「文」なのである。これがい

わゆる「故」である。」(表1文献番号45, 四庫第16冊 pp694)

馮椅は朱震を承け「天文」「地理」を同一とし、「気」や「形」として顕在した現象と見る。一方「象」「形」については蘇軾を引き、

「蘇軾氏は、「象」とは「形」の精髓であり、上方に発散したものであり、「形」とは「象」の本体であり、下方に留まったものであると言う。人々はそれらが上下にあるのを見て、実際に二分されていると考えてしまい、それが同一でないことはあり得ないと知らなかったのだ。」

(表1文献番号45, 四庫第16冊 pp686)

蘇軾の一元論を用いて「天文」「地理」が同一であるとの見解を補強する³⁵⁾。しかしそこには原理についての言及はみられない。

王宗傳(生没年不詳)の『童溪易傳』(成立年不明)も類似した一元論を認める「表出説」を展開する。彼の「象」「形」に対する注には

「天に在りては」「地に在りては」という『易経』の文言は、易の原理が存在しない所の無いことを言う。それに続く「象と成る」「形と成る」という文言は、易の原理には為し得ないことなど無いことを言う。人々は皆、日月星辰を天に在って成る所の「象」とし、山川草木を地に在って成る所の「形」とするが、ああ、それは不適當な見解である。諸物は皆「象」を有し、また「形」を有している。「象」と「形」は別個の概念ではないのである。ここに私見を付しておこう。即ち、「形」の未だ顕現しないものが「象」であり、「象」が既に顕現したものが「形」であるばかりなのだ。」(表1文献番号46, 四庫第17冊 pp321)

とあり、「象」と「形」を一実体とみなし、「象」「形」の区分とは、その実体が顕在するか否か、観察者の側から言えば、認識できるか否かによった認識上の区分に過ぎないとする³⁶⁾。そして「天

文」「地理」については次のように解する³⁷⁾。

「(天)文」に所在するものが「明」であり、「(地)理」に所在するものが「幽」である。(天文地理を)観察して「幽明の故」が認識できないことなどありえない。この「故」とは、その「幽明」が存在する原因を意味する。」(表1文献番号46, 四庫第17冊 pp328)

王宗傳による「天文」「地理」の定義は判然としないが、各々が「明」と「幽」を内包すること、それらを観察することによって「幽明」の生じる原因を知り得ることから、「幽明の故」なる原理を表出する現象と考えられていることが推察される。

この他、楊萬里の「表出説」を継ぐ注釈者として、方實孫(生没年不詳)がある。その著である『淙山讀周易』(成立年不明)には次のような注が見える³⁸⁾。

「天文」を仰ぎ観て、「地理」を俯し察するという文言は、「(形)象」を以て言えば、日月や山沢に類するものが、皆『易経』の原理中に備わっていることを言うのである。そして、その「天文」「地理」に即して陰陽顕晦の原理を推測し、それらの生ずる原因を知る。これが、天地とこの「道」なる究極原理とが一体であるということである。」(表1文献番号59, 四庫第19冊 pp786)

方實孫は、「天文」「地理」の観察によって、宇宙全体に通ずる「陰陽顕晦」の原理を求めるという楊萬里の説を踏襲している。彼の解釈は明らかに原理の表出する現象として「天文」「地理」を捉えるものである。ただし、方實孫はこの「陰陽顕晦」の原理を「象」「形」概念にも適応する³⁹⁾。

「天に在りては象となる」とは、太陽があれば月がそれに対応して存在する、といった種類の事実を指し、「地に在りては形となる」とは、山岳があればそれに対応して沼沢が存在する、

といった種類の事実を指す。天地間の諸変化には必ず対立があって孤立することはないのである。」(表1文献番号59, 四庫第19冊 pp784)

この注からも窺い得る通り、方實孫は「日」に対する「月」, 「山」に対する「沢」といった天上地上に認められる普遍的対立の存在を「象」「形」と見做したのである。これらは天地の間のあらゆる変化が必ず一対として把握される「陰陽顕晦」の原理の表出として例示されたものであった。「天文」「地理」の注にある「日月」「山沢」の語も、この対立の一例たる「象」「形」を意味しており、それらの存在が『易経』の原理に即すると言うのである。

南宋末の丁易東(生没年不詳)の『易象義』(成立年不明)にも「表出説」に分類される説が窺われる。彼は「天文」「地理」を次のように注する⁴⁰⁾。

「仰ぎては以て天文を觀る」というのは、日月の運行、風や稲妻の運動の類であり、「俯しては以て地理を察る」というのは、山沢の流動と静止、水火の乾燥と湿潤の類である。これらは皆(その性質の対立のために)最も顕著な現象であり、それを介して、最も微妙な(陰陽の)原理が認識されるものである。これはかつてある学者(程頤)の言った「體用一源、顯微無間(本体と作用は同一であり、顕著な現象と微妙な原理に間断はない)」という言葉そのものであり、「幽明の故」なのである。」(表1文献番号65, 四庫第21冊 pp722)

丁易東もやはり「天文」「地理」を原理の表出としての現象として見る。特に、各々八卦を象徴し、陰陽の対立を示す日月、風霆(風と稲妻)、山沢、水火⁴¹⁾をその例として列挙し、それを介して原理が認識されると論ずる所を見ると、現象としての「天文」「地理」の背後には楊萬里や方實孫の説く陰陽の原理が想定されていることが理解でき

る。そればかりでなく、丁易東はこの「表出説」を、程頤の『伊川易傳』に見える「體用一源、顯微無間(表1文献番号15, 四庫第9冊 pp157序:1)」と付会する。これは次節に述べる南宋の朱熹(1130-1200)によって『易経』や周敦頤(1017-1073)の『太極圖説』(成立年不明)の根柢とみなされた宋学の中心的な論理であり⁴²⁾、したがって丁易東の注は朱熹の学説をも参照していると考えられる。この「本体と作用は同一であり、顕著な現象と微妙な原理に間断はない」という論理を「天文」「地理」なる現象と「陰陽」の原理との関係に適用する丁易東の説は、「表出説」中の原理と現象の乖離を統合へと向かわせるものであったといえよう。

以上が「表出説」に含まれる注釈である。「表出説」は南宋初期より宋朝滅亡までの間、多くの儒者によって主張された。彼らは、先行する「構造説」や「認識説」の影響を受けながらも、「天文」「地理」を形而上の原理の表出として理解したのである。しかしながら、この「表出説」における関心は、初期こそ朱震のように原理の表出たる「天文」「地理」という現象の性質に向かったものの、次第に項安世や楊萬里のように原理そのものへ、更には丁易東のように原理と現象との間の関係へと移ろった。朱震から丁易東に至る解釈の変遷も、凡そこの関心の移行に沿うのである。

4. 朱熹の「時空説」

しばしば朱子と尊称される南宋の朱熹は、「天文」「地理」の二語を、一種の時間、空間概念とする定義を残している。前節に紹介した項安世や楊萬里と同世代の朱熹は、「構造」「認識」「現象」のいずれにも当てはまらない新たな「天文」「地理」理解を示してみせたのである。彼の『周易本義』(1265年刊)には、次のようにある⁴³⁾。

「天文」とは則ち昼夜上下を有するということ

であり、「地理」とは則ち南北高深を有するということである。」(表1文献番号30, 四庫第12冊 pp681)

原文ならば「天文則有晝夜上下, 地理則有南北高深」, わずか十六字の短文である。果たしてこれが時間と空間としての定義を与える「時空説」と言い得るのであろうか。本節では, 朱熹以下, 「時空説」を説く宋代の注釈を提示し, その内容の分析と紹介を行う。朱熹の思想は彼を仰ぐ幾人もの後進によって語録として記録され, 夥しい数の著作が伝えられており, 本稿の研究対象である宋代の易注にも朱熹の解釈を記録し, かつ補足するものが収められる。そのため, 本節では, 上記の朱熹『周易本義』の他, 朱熹の孫である朱鑑(生没年不詳)の編纂となる, 朱熹の『易経』に関する諸説を蒐集した『朱文公易説』(成立年不明), 朱熹の孫弟子に当たる董楷(生没年不詳)の『周易傳義』(1216年成), および『周易本義』を敷衍する熊禾(生没年不詳)の『易経訓解』(1643年刊), 俞琰(生没年不詳)『周易集説』(1311年刊)を取扱う。なお, これらに加え朱熹の語録の集成である『朱子語類』を参照した⁴⁴⁾。

まず, 彼の「天文」「地理」の概念としての性質, つまり「有晝夜上下」「有南北高深」の意義を明らかにする。結論から言えば, この二句は, 一種の時空間を意味している。「晝夜上下」とは, 晝夜交替の不断の循環から生成される無限の時間, 宇宙の上半下半への拡散から生成される無限の空間であり, 「南北高深」とは, 南方北方の水平的な拡がり, 高所と深所という垂直的な拡がりから成る有限の空間である。「上下」については, 李鼎祚のごとき物質の上昇下降を意味するのではないか, との疑問もあり得るが, 朱熹の語録にも, 「「天文」が半分を上方に持つならば, 残りの半分を下方に持っていなければならない。」(表1文献番号55, 四庫第18冊 pp625)

とあり⁴⁵⁾, 「天文」が上下に広がる存在であることが明言されている。また, 「晝夜」を時間とする解釈についても, 『朱子語類』の『太極圖説』に関する

「動静とは晝夜のようなものであり, 陰陽とは東西南北の四方に発散するようなものである。(それゆえに, 『太極圖説』にある)「ひとたび動きひとたび静まる」という語は時間について, 「陰に分かれ陽に分かれ」という語は位置についての言及となる。」

という条に朱熹自身が「動静」と「晝夜」と「時間」を相同とみなす叙述がある(朱, 1962: 3816)⁴⁶⁾。更に, この条に対して, 今井(1958: 421)は「動静は晝夜の如く, 時間的継起的なものとして説かれ, 陰陽は東西南北の如く, 空間的方位的なものとして説かれてゐる」と言い, 朱熹の時間論を考察した木下(1999:72)も「朱熹においては, 宇宙の全域に互って, 一つの時間として現れる陰陽循環の絶対的・根源的リズム進行こそが, 晝夜更替という時間だった」と記すなど, 「晝夜」の時間概念としての用法は既往の研究の指摘する所でもある。

そのほか, 空間概念にあたる「上下」「南北高深」とは単に天上地上の物体の分布や拡がりを目指すに過ぎないのではないのか, とともに考える向きもあろう。しかし, この疑念も朱熹の「象」「形」に対する注を対照することによって解消する⁴⁷⁾。

「「象」とは日月星辰の属(諸天体)であり, 「形」とは山川動植の属(地形等の無生物や動物植物等の生物)である」(表1文献番号30, 四庫第12冊 pp680)

この定義は「天文」「地理」と同じく簡潔を極め, かつ韓康伯による「日月星辰」「山川草木」を「象」「形」とする古説¹⁾とも類似する。しかし, 朱熹は「象」を「日月星辰之属」, 「形」を「山川動植之属」と注し, 双方に「之属」を付加することで,

「象」「形」が特定の物質的存在ではなく、それらに代表される物体一般として定義を拡張する。更に、韓康伯以降「山川草木」であった「形」を「山川動植之属」と改め、「地形（山川）および植生（草木）」を静的な無生物（山）と動的な無生物および動的な生物（動物）と静的な生物（植物）、つまり地上に存在する無機物から有機物までの物質全般と読み替える。即ち、朱熹においてはこの「象」「形」こそが、天上地上の物体の総称なのである。したがって、朱熹の時空間たる「天文」「地理」は、物体やその分布・拡がりとは峻別されることになる。

それにしても、「昼夜上下」を無限、「南北高深」を有限とするのは牽強の誹りを免れないのではないのか。この解釈については、熊禾の端的な指摘に依拠している⁴⁸⁾。

「経緯（縦横の無限の広がり）を有する天文を仰ぎ観て、一定（ある範囲に広がる）である地理を俯して察る。」（表1文献番号79、續修第2冊 pp381）

熊禾は「天文」を「経緯」あるものとして、「一定」である「地理」に対置する。これは「天文」の縦横の広がり無限に対して、「地理」には一定に区切られる限界が認められることを示している。「天文」たる昼夜の循環と宇宙の上方下方は極まりようがなく、その限界は想像すら適わない。他方、「地理」たる南北高深にはいずれも、南極・北極・山頂・海淵という限界が認められる。故に「天文」は無限であり「地理」は有限とされるのである⁴⁹⁾。なお、この「天文」のような無限の空間は、朱熹を幼少時より悩ませていたらしく、次のような文言を以て無限と有限の区分と、無限の先に思索の及ばぬことを述懐している（朱、1962:3774-3775）⁵⁰⁾。

「私は五歳六歳の頃から、天地四方の空間の外には、一体何があるのだろうか」と懊悩し続けてき

た。四方が無限であるという学説を目にするに、私はそこに限界があるべきではないかと考えた。それは壁に似ている。壁の後ろにはまた何かしらの物事が存在するべきである。当時、私はほとんど病的なほどに思索に没頭した。そして今になっても、まだあの壁の後ろを知らぬままである。」

ここでも認識の可不可によって空間が二分されている。このように、朱熹の「天文」「地理」の無限・有限の区分は認識を根拠とする。そればかりか、朱熹の「天文」「地理」概念はそれ自体としても認識に基礎を置く。このことは「昼夜上下」「南北高深」の二句の直前にある「有」字がよく示す所である。「天文」とは「昼夜上下」そのものではなく、「地理」もやはり「南北高深」そのものではない。それらを内心に「有」してはじめて、「天文」「地理」が成立するのである。これより「昼夜上下」「南北高深」とは無限有限の時空間であり、その時空間の認識中への内在こそが「天文」「地理」の本質と理解される。

朱熹の「天文」「地理」の持つ意義はこれにとどまらない。彼の語る所によれば、「天文」「地理」、および先に触れた「象」「形」は、原理の表出としての性格をも内包している。次の箇所はそれを最も簡明に述べる⁵¹⁾。

「昼は「明」、夜は「幽」、上は「明」、下は「幽」である。昼夜の運行と日月星辰が天空の上下に存在することを観察することによって、「天文」に関する「幽明」を規定する原因も明らかにし得るのである。南は「明」、北は「幽」、高は「明」、深は「幽」である。南北高深の範囲を観察して、「地理」に関する「幽明」を規定する原因も明らかにし得るのである。」（表1文献番号55、四庫第18冊 pp626）

ここでは「天文」「地理」に用いられた「昼」「夜」「上」「下」「南」「北」「高」「深」の語が、いずれ

も「幽明」の対立を反映している。すなわち、「天文」「地理」には、諸物の「幽明」を規定する原因が表出するのである。また、次の問答は、その「幽明」を決定する原因が陰陽の原理であることを示す⁵²⁾。

「質問：『仰ぎては以て天文を觀，俯しては以て地理を察る』とは、『易經』の原理を用いて觀察することでしょうか。朱熹の解答：（その通りである）それだから『このゆえに幽明の故を知る』という語が続く。幽明とはつまり陰陽剛柔である。いかに多種多様な説明があっても、それらはただ一つの陰陽の原理である。南とはつまり「明」であり、北とはつまり「幽」である。日が昇れば「明」であり、暮れるならば「幽」である。「天文」「地理」を觀察して、皆その原理を知るのである。」（表1文献番号55，四庫第18冊 pp625-626）

「天文」「地理」は、つまるところ、陰陽の原理の表出であるというのである。それは同世代の項安世や楊萬里の説にも類似する。更に、次の『朱子語類』の記述からは、「昼夜上下」「南北高深」のみならず、「天文」「地理」自体、あるいはその内部の諸現象までもが陰陽の表出と考えられていることがわかる（朱，1962:3066）⁵³⁾。

「『天文』とは陽，『地理』とは陰である。しかしながらそれら各々の内にも陰陽の別がある。天では昼は陽，夜は陰，日は陽，月は陰である。地ならば高が陽に，下が陰に，平坦ならば陽に，險阻ならば陰に，東南は陽に，西北は陰にそれぞれ属するような具合である。なお「幽明」とは陰陽に他ならない。」

この陰陽の原理の表出は、「日月星辰之屬」「山川動植之屬」たる「象」「形」にも適用される。董楷の引く語録には次のようにある⁵⁴⁾。

「変化は「象」「形」を原因としてその後に発生するものではない。変化流行は「象」「形」の

ように出現しない。それゆえに、「象」「形」を介することによって変化の軌跡を認識することが可能となる。日月星辰は「象」であり、山川動植は「形」である。「象」とは陽気の形成するものであり、「形」は陰気の形成するものである。しかしながら陽の中にも陰がある。それゆえ、日と星が陽であれば、月と辰は陰である。また陰の中にも陽がある。それゆえ、山が陰ならば川は陽となる。」（表1文献番号60，四庫第20冊 pp538）

このように「象」「形」は変化を発生させる原理の存在を示す現象と解される。時空間たる「天文」「地理」とその内部に見出される「象」「形」は、共に陰陽の原理に通じているのである。

以上を総合すれば、朱熹の「天文」「地理」概念は、観察者の認識中に内在し、陰陽の原理を表出する無限の時空間および有限の空間であるということになる。この「時空説」は、時間と空間を「天文」「地理」の本質とする点で従前の三説から区別される。しかし、朱熹の時間と空間の概念は必ずしもその全てが独創という訳ではない。そもそも朱熹の「天文」のような無限の時空間は、遠く前漢の『淮南子』（張，1919）齊俗訓にみえる「宇宙」の概念に通ずる。『淮南子』は現在広く用いられる「宇宙」の語の出典でもあるが、その原義は、「過去から未来への広がり」を「宙」と言い、四方上下への広がり「宇」と言う」という、無限の時間および空間であった⁵⁵⁾。この種の無限でありかつ内部に存在する諸物の影響から独立した絶対時間、絶対空間という概念の出現は、西欧においてはニュートンをまたねばならないが、中国においては紀元前には既に存在していたのである。そして、「天文」「地理」を空間概念とする解釈についても、北宋にその先例を発見することができる。龔原（1043-1110）の『周易新講義』（成立年不明）には次のようにある⁵⁶⁾。

「そもそも陰と陽，剛と柔が交錯し，（認識しがたい）「幽」が変化し，（顕在的な）事物に縦横の広がりが見ることが「天の文」である。…高所と低所とが傾斜によって連絡し，東西南北の広がり結合する。そしてそこに動植物が生息し，地形も定まる。それが「地の理」である。」（表1文献番号75，續修第1冊 pp748）

龔原は「天文」を変化と縦横の広がり，「地理」を垂直的水平的な広がりとしており，一種の「空間説」を展開している。ただし「天文」も空間であり時間概念は含まれないこと，空間と内部の諸物との区別が為されていないこと，陰陽を原理としてではなく天上の物質とみなすことなど，朱熹の「時空説」とは異質な点も多い。よって，朱熹の創見は，まさに「天文」「地理」を時空間に配し，かつ認識の不可による無限と有限との別を，概念区分の根拠とした所であったというべきであろう。

以上が朱熹とその門流による「時空説」の大体である。朱熹の注釈それ自体は十六字という短文であるが，彼の後進の書き留めた所説によって「天文」「地理」各々の定義も判明に理解し得た。朱熹の「天文」「地理」は，時間と空間を概念の核とする点で独創的ながら，「認識による生成」「原理の表出」といった先行する学説の論点をも取り込むものであった。なお，この「時空説」に該当する諸説については，先例である北宋の龔原を除きいずれも朱熹の説の祖述であるため，概念の変遷はみられない。しかし，南宋の後期から末期にかけて，「時空説」に依拠する儒者が多数輩出されたということは注目すべき事実である。

IV 結

以上，本稿では，唐代から宋代にかけて著された「天文」「地理」の注釈を網羅し，その語義の変遷を記述した。ここでは本稿元来の目的に立ち

返り，「天文」を考慮にいれず，「地理」のみの語義の展開を概観し，結びに代えたい。

未だ『易経』の注釈において「地理」が定義されなかった唐以前，それは漠然と地形や植生を表す語に過ぎなかった。それが唐に入ると，「地理」は孔穎達と李鼎祚によって『易経』中の一概念としての明確な定義を獲得する。孔穎達は地形の間に見出される配列より生まれる「構造」として，李鼎祚は物質の下降による変化の内，「認識」の範囲に入るものとして，この語を定義したのである。また，李鼎祚の説は「地理」と「天文」の実体を同一視するものでもあった。

宋代の注釈者は，この「構造」と「認識」を先例としつつ多様な議論を展開した。まず，北宋の初めには，孔穎達と近い「構造説」が現れた。これは地上に認められる純粋な位置関係として「地理」を定義するものであったが，時代が下るとともにその抽象の度を高める傾向を有していた。また，やや遅れる北宋中葉には，主観・認識に万物生成あるいは区分の根拠を求める「認識説」が興った。ここでは，「地理」は「天文」と同一実体であり，世界の認識可能な部分を恣意的に区分した結果見出されるものに過ぎないと解釈された。そして，南宋の初期には「地理」を原理の表出する所の現象として捉える「表出説」が成立した。ただし，「表出説」においても「地理」と「天文」との区別は失われたままで，しばしば「象」「形」とも同一の概念として扱われた。このような中，南宋の後期に再び「地理」と「天文」の区別を明らかにしたのが朱熹であった。朱熹は「地理」を，認識中に内在する，原理の表出としての有限な絶対空間として定義した。この「空間説」（「天文」を含まないために「時空説」でない）は，朱熹とその門流によって詳細な見解が現代にも伝わっている。朱熹の「地理」概念は，物質とも峻別される純粋な空間概念であり，無限の時空

間である「天文」とは異なる、人類の認識の行き届く空間を意味していた。

このように、『易経』に見える「地理」なる語は、唐代における孔穎達と李鼎祚の注を源流としながら、宋代には「構造説」「認識説」「表出説」「空間説」といった多様な語義を獲得するに至ったのである。ここで確認された諸定義の西欧科学に比しても遜色のないことは、「地理」を地上の諸物の幾何学的な配列という定義を行った朱長文や、現象としての「地理」（および「天文」）を観察してその背後にある原理法則を認識するという主張を為す朱震および楊萬里、ニュートンの絶対空間を認識中に基礎づけたカントの空間論（犬竹，2002：115）を思わせる朱熹などの例からも窺い知れよう。殊に、朱熹の思想については、ライプニッツ、ヴォルフ、そしてカントへの影響が複数の研究によって既に指摘されており（堀池，1996/2002；井川，2009；Schonfeld，2006）、カントを創始者の一人に数える近代地理学への影響も示唆されることになる。実際、「地理」に対する「認識によって区分される原理の表出たる有限の空間」という定義は、景観や地域を介して地表面全体を理解しようとする伝統地理学の方法論にも通じるものである。ただし、宋学の西欧への伝播は明代より始まるため、直接の影響の有無については更なる考究が必要である。

これらに加えて、序において触れた風水思想との関係についても一言を付しておきたい。海野（2004：49）によれば、風水書に「地理」の名を冠する伝統は唐代に端を発し、宋代において一般化されるとともに、地誌や紀行に当たる「地理類」との併存が始まったという。この、唐に始まり宋に多数現れるという経過は奇しくも本稿の辿った「地理」の注釈史と呼応する。ここに、この二者の相関についての次のような推測が可能となる。つまり、「地理」が地形や植生の総称であった時代に

は地誌を扱う書物にのみ「地理」の名称が与えられたが、孔穎達と李鼎祚によって新たな定義が施された唐代においては風水思想を扱うものも「地理書」なる呼称を得、多様な「地理」解釈が出現した宋代には地誌に当たらず「地理書」の存在も一般化したと考えられるのである。既に朱熹をはじめとする『易経』の注釈者が風水思想に関心を寄せていたという研究もあり（牧尾，1974；宮崎，2003；水口，2012）、その実態の解明が待たれる。

以上が本研究によって得られた成果である。就中強調されるべきは、唐から宋にかけての中国において、「地理」という概念を巡る、かくも多様な議論が存在したという一事である。現在の地理学において、近代以前の中国、あるいは日本を含む周辺諸国の伝統的な学術や思想に対する理論上の関心は皆無に近い。ところが、そこに残された膨大な文献中には、本稿のようにただ一語をひもとくばかりでも一文をものし得るような、豊饒な思想が眠っているのである。

また、本稿では、初期の「地理」の語義が記された唐代および宋代の『易経』注釈書を扱ったが、時代も古きに過ぎ、以降の元、明、清の各王朝、そして民国以降の現代中国に比較して、参照可能な文献数は実に僅少である。のみならず、周辺諸国においても『易経』注釈書は著されている。とすれば、本稿は特に古い「地理」を拾い集めたものに過ぎない。今後、時代や地域を拡張し研究を進めるならば、東洋的「地理」あるいは日本的な「地理」のより包括的な把握とともに、「地理」概念と近代地理学との関係にも深い知見をもたらし得るのではないだろうか。

[付記]

本論文作成にあたり、筑波大学大学院人文社会科学研究科の井川義次先生には漢籍中の語句解釈から文献精読に至るまで懇切なる御指導と御助言を賜りました。

また、松井圭介先生をはじめ、筑波大学大学院の人文地理学・地誌学・空間情報科学分野の諸先生方からも多大なる御指導、御助言を賜りました。ここに改めて感謝の意を表します。なお、本稿の骨子は日本地理学会2015年春季学術大会（於：日本大学）において発表したものである。

【編集委員会付記】

本稿は、他学会の機関誌に投稿の後、一旦取り下げた原稿を骨子として本学会に新たに投稿されたものである。編集委員会において検討の結果、「地理」の概念を議論した本論文を本誌に掲載することに異議はなく、また、公刊した後に学術的議論を喚起することに一定の意義が認められるとの意見が大勢を占めたため、受理されたものである。

注

- 1) 『史記』『始皇本紀』には「上（天井）には天文が具わり、下（床）には地理が具わっていた（上具天文、下具地理）」とあり、『漢書』『郊祀志下』には「三光（天文）は天文であり、山川は地理である（三光、天文也、山川、地理也）」あるいは「天文とは日月星辰、輝き仰ぎ見られるものである。地理とは山川海沢、ものが生まれ殖える所である（天文、日月星辰、所昭仰也。地理、山川海澤、所生殖也）」とある。これらの文章からは「天文」「地理」はそれぞれ天体や地形の総称という以上の意味を持ち合わせていないことがわかる。ところが、韓康伯は次のように「象」「形」に言及し、「象」を天体、「形」を地形あるいは植生として定義している。この注によって、『漢書』以来の天体地形としての「天文」「地理」の用法は「象」「形」へと受け継がれ、以降「天文」「地理」が天体地形とは異なった概念として理解される基礎が形成されることとなる。「象」とは日月星辰のようなもの、「形」とは山川草木のようなものである。天体の運行が昏明すなわち昼夜の別を生み、山と澤の間の大気移行によって雲雨が生じる。それゆえに変化が現れるという（象況日月星辰、形況山川草木也。懸象運轉以成昏明、山澤通氣而雲行雨施、故變化見矣。）」（表1文献番号5、四庫第7冊pp256巻7:1）
- 2) 「仰以觀於天文、俯以地於察地理者、天有懸象而成文章、故稱文也、地有山川原濕、各有條理、故稱理也。是故知幽明之故者、故謂事故也、以用易道仰觀俯察、知无形之幽、有形之明、義理、事故也（巻11:13）。」
- 3) 「荀爽曰、謂陰升之陽則成天之文也、陽降之陰則成地之理也（巻13:10）。」
- 4) 「荀爽曰、幽謂天上下不可得觀者也。…明者天地之間萬物陳列著於耳目者（巻13:10）。」
- 5) 「義曰、天文者日月星辰、布設懸象、成文章、故稱文也。地理者則謂山川原濕、高卑上下、各有條理、繁盛於地、故稱理也（繫辭上:28）。」
- 6) 「義曰、象謂日月星辰也、形謂山川草木也。夫天以剛陽之氣居於上而生物。地以柔陰之氣在於下而承天。在於天者則為日月星辰之象。在於地者則為草木山川之形。是天地之道生成之理自然然而也（繫辭上:6）。」
- 7) 「（仰以觀於天文）日月是也。（俯以察於地理）山川是也。（是故知幽明之故）觀日月之象則天明可知。察山川之形則地幽可見（巻7:8）。」
- 8) 「陽輕清、故升而為象。陰重濁、故降而為成形（巻7:2）。」
- 9) 「天曰文者、經緯度數燦然有章也。…地曰理者、高下原委脈絡分明也（上繫:8）。」
- 10) 「在天成象有自然之文、在地成形有自然之理（巻7:7）。」
- 11) 「仰觀俯察而乾坤之體以定…形象于天地之間者有自然之變化（巻7:1）。」
- 12) 「在天成象者莫不有自然之文、在地成形者莫不有自然之理（巻33:9）。」
- 13) 「仰觀於天而日月星辰之運行有自然之文、俯察於地而山岳江河之流止有自然之理、而幽明之故、可得而知矣（巻13:10）。」
- 14) なお、本書には「天文」「地理」に対する注は認められない。
- 15) 「天文地理皆不能離陰陽五行。以其所見、揆所不見、則知幽明之理一也（巻5:6）。」
- 16) 「象有隱見。形有死生（巻5:1）。」
- 17) 周敦頤『太極圖說』『五行本一陰陽也、陰陽一太極也』また、朱子の付した『太極圖說解』によれば、五行は今でいう所の原子のように個別に存在し得るものではなく、いかなる物質にも五行が共在するという（湖、1981:30）。
- 18) 「太虚無形、氣之本體。其聚其散、變化之客形爾。」（張、1978:7）
- 19) 「天文地理、皆因明而知之。非明則皆幽也。此所以知幽明之故。萬物相見乎離、非離不相見也。見者由明、而不見非无物也、乃是天之至處（巻3:7）。」
- 20) 「氣聚則離明得施而有形。氣不聚則離明不得施而无形。方其聚也、安得不謂之有。方其散也、安得遽謂之无。故聖人仰觀俯察、但云知幽明之故、不云知有无之故（巻3:7）。」なお、同文が『正蒙』（張、

- 1978:8)にも重出している。
- 21)「此與形象變化一也(卷7:7)。」
- 22)「天地一物也。陰陽一氣也。或爲象或爲形，所在之不同，故在云者明其一也。象者形之精華，發於上者也。形者象之體質，留於下者也。人見其上下，直以爲兩矣。豈知其未嘗不一邪。繇是觀之，世之所謂變化者，未嘗不出於一而兩於所在也。自兩以往有不可勝計者矣。故在天成象，在地成形，變化之始也(卷7:1)。」
- 23)「仰觀乎在天成象之文，俯察乎在地成形之理，可以知幽明之故。…萬物出乎天地，聚則精氣爲物，散則游魂爲變(卷18:6)。」
- 24)「天氣也而成文，地形也而有理。形散爲氣，明而幽也。氣聚成形，幽而明也。仰觀乎天，凡地之成形者莫不有是文。俯察乎地，凡天之成象者莫不具是理。故分而爲二，揲之以四，生二儀四象八卦成三百八十四爻萬有一千五百二十策，皆源於太極。知此，則知幽明之故也(卷7:9)。」
- 25)「在天成象者陰陽也。在地成形者剛柔也。天變則地化，變者陰陽極而相變也。陰陽之氣變於上，剛柔之形化於下(卷7:23)。」
- 26)「无形者道，有形者物。乾坤道也。天地物也。故道有乾坤而无天地，物有天地而无乾坤(卷7:1)。」
- 27)「因在天成象以見乾之變化，因在地成形以見坤之變化。故曰變化見矣(卷7:34)。」
- 28)「由易之道，仰觀俯察，則天地幽明之故无不知。幽則天地之道，其隱者也。明則天地之道，其顯者也(卷7:12)。」
- 29)「昔者伏羲氏之始作易也，仰觀於天，見陰陽之象，俯察於地，見剛柔之形，於是制爲奇耦之畫，以準其象使萬物之情，皆以類而從，而天文地理遂與人事物相通而爲一，而幽明之故可得而知矣(卷13:5-6)。」
- 30)「在天成象則雷霆風雨日月寒暑，皆此理之往來也。在地成形則男女雌雄虛實高下，皆此理之感應也(卷13:1)。」
- 31)ここで『易経』の二進法について解説する。『易経』は乾，兌，離，震，巽，坎，艮，坤という八つの要素，即ち八卦と，それを二つ重ねた六十四卦から構成される。そしてこの八卦は，それぞれ乾☰兌☱離☲震☳巽☴坎☵艮☶坤☷という記号によって表現される。この記号は，陰陽を表す爻と呼ばれる記号三つを組み合わせたものであり，爻には陽を示す実線と，陰を示す破線の二種類が存在する(例えば乾卦☰は陽爻たる実線のみで構成される)。ここで陽の実線を0とし，陰を示す破線を1とすれば，八卦はそれぞれ，000，001，010，011，100，101，110，111と表現され，現代の二進法そのものとなる。
- 32)「仰以觀於天文，俯以察於地理，是故知幽明之故，何謂也。曰，此聖人見天地陰陽顯晦之理，而得天地幽明之事也。…天文顯矣，所以運是文者，則不可知。地理顯矣，所以具是理者，則不可測，謂其幽也。文可觀，理可察也，謂其明也。孰運乎是，孰具乎是也(卷17:15)。」
- 33)「有物可見，無物可執之謂象，有物可見，有物可執之謂形。日月在天象也。山澤在地形也(卷17:3)。」
- 34)「文者氣之所形，如日月星雲之象。理者形之所成，如高下流峙之義。文，明也，理，幽也。朱子發曰，仰以易觀乎天，則凡地之成形者莫不有是文。俯以易察乎地，則凡天之成象者莫不有是理。然，則幽明一致也。幽者明之理，明者幽之文，是所謂故也(卷43:19)。」
- 35)「蘇氏曰，象者形之菁華，發於上者也，形者象之體質，留於下也，人見其上下，真以爲兩矣。豈知其未嘗不一耶(卷43:3)。」
- 36)「在天在地，此易无乎不在也。成象成形，此易无乎不爲也。人皆曰，日月星辰，此在天所成之象也。山川草木，此在地所成之形也。噫，未之盡也。物物皆有是象，物物皆有是形。象與形亦非二物也。吾嘗論之矣。形之未著者，謂之象。象之既著者，謂之形(卷27:5)。」
- 37)「在文爲明，在理爲幽，仰觀俯察而幽明之故无乎不知。故者，其所以然也(卷27:18)。」
- 38)「仰觀天文俯察地理，以象而言，如日月山澤之類，皆備於易。即此以推陰陽顯晦之理而知其所以然。是天地不離此道也(卷17:8)。」
- 39)「在天成象，如有日則有月之類，在地成形，如有山則有澤之類。天地變化有對无獨(卷17:4)。」
- 40)「仰以觀於天文，如日月之運行，風霆之動盪。俯以察於地理，如山澤之流峙，水火之燥濕。皆因其至著之象而知其至微之理。先儒所謂體用一源，顯微无間，即所謂幽明之故也(卷14:11)。」なお，文中の「流峙」なる表現は，馮椅『厚齋易學』における注にも含まれるが，丁易東においては流動と静止を，馮椅では河川丘陵を意味するものとして用いられている。
- 41) 日月は乾☰と坤☷，風霆は巽☴と震☳，山沢は艮☶と兌☱，水火は坎☵離☲を象徴する。ここでは各々の組み合わせにおいて爻(実線が陽，破線が陰)が反転していることに注目されたい。これらの組み合わせは爻の反転の示すようにそれぞれ一対のものと考えられている。加えて，八卦の陰陽は純陽の乾☰と純陰の坤☷を除き，陽爻(実線)

- の少ないものを陽、陰爻（破線）の少ないものを陰とする。例えば水を象徴する坎☵は陽卦であり、火を象徴する離☲は陰卦となる。そのため、日月、風霆、山沢、水火と、それぞれの象徴する八卦は、陰陽の対立を含蓄するのである。
- 42) 今井（1958:115）は「その體用顯微の源相即思想を、特に宋學的論理として採り上げたのは朱子であり、これによって太極圖說解を作つてゐる。太極圖說の思想的根據がここにあるとするもので、伊川易傳が宋代易學の主流とされるに至つたのも、一にこの朱子の採り上げ方によると考える」とする。『太極圖說』は宋学の形而上学的基礎を創立した文献として、北宋より常に議論の中心にあった。
- 43) 「天文則有晝夜上下，地理則有南北高深（卷7:4）」
- 44) なお、『文公易說』は『朱子語類』等の諸書の説を集約した二次資料であるが、宋代の「天文」「地理」に関する「易注」を網羅するという本稿の目的上、特別の事情が無い限り、本文では『文公易說』『周易傳義』に従い、『朱子語類』との異同は注に付記した。
- 45) 『文公易說』「天文有半邊在上面，須有半邊在下面。曼淵 録（卷10:3）。『朱子語類』（朱，1962:80）「天文有半邊在上面，須有半邊在下面。淵（卷2:1）」
- 46) 「動靜如晝夜，陰陽如東西南北，分從四方去。一動一靜，以時言，分陰分陽，以位言（卷94:2）」なお、この文は『太極圖說』の「太極，動而生陽。動極而靜。靜而生陰。靜極復動。一動一靜，互爲其根。分陰分陽，兩義立焉」（湖，1981:22）について言及したものである。
- 47) 「象者日月星辰之屬，形者山川動植之屬（卷7:1）」
- 48) 「仰觀經緯之天文，俯察一定之地理（卷3）」
- 49) なお、「地理」が有限の時間としての意味を含まないのは、時間自体の限界が想定され得ない、つまりは有限の時間自体が存在しないことによる。
- 50) 『朱子語類』「某自五六歲，便煩惱道，天地四邊之外，是什麼物事。見人說四方無邊，某思量也須有箇盡處。如這壁相似。壁後也須有什麼物事。其時思量得幾乎成病。到而今，也未知那壁後（池本作「天外」。夔孫錄作「四邊」）（義剛。孫錄略）（卷94:10-11）」
- 51) 『文公易說』「晝明夜幽上明下幽，觀晝夜之運日月星辰之上下，可見天文幽明之所以然也。南明北幽高明深幽，觀南北高深，可見地理幽明之所以然也。萬人傑録（卷10:4）。『朱子語類』（朱，1962:3065-3066）「晝明夜幽上明下幽，觀晝夜之運日月星辰之上下，可見此天文幽明之所以然。南明北幽高明深幽，觀南北高深，可見此地理幽明之所以然。學履（卷74:13）。』『周易集說』「紫陽朱子曰，天文則有晝夜上下，地理則有南北高深。晝明夜幽，上明下幽，觀晝夜之運，日月星辰之上下，可見天文幽明之所以然也。南明北幽，高明深幽，觀南北高深，可見地理幽明之所以然也（卷28:16）。」
- 52) 『文公易說』「問，仰以觀於天文，俯以察於地理，是以易書之理仰觀俯察否。曰，所以仰以觀於天文，俯以察於地理，是故知幽明之故。幽明便只是陰陽剛柔，凡許多說只是一箇陰陽。南便是明，北便是幽，日出地上便是明，日入地下便是幽。仰觀俯察，便皆知其故（卷10:3-4）。』『朱子語類』（朱，1962:3066）「問，仰以觀於天文，俯以察於地理，是以此易書之理仰觀俯察否。曰，所以仰以觀於天文，俯以察於地理，是故知幽明之故。幽明便只是陰陽剛柔，凡許多說話，只是說一箇陰陽。南便是明，北便是幽，日出地上便是明，日入地下便是幽。仰觀俯察，便皆知其故（卷74:13）。」
- 53) 『朱子語類』「仰以觀於天文，俯以察於地理，天文是陽，地理是陰，然各有陰陽。天之晝是陽，夜是陰，日是陽，月是陰。地如高屬陽，下屬陰。平坦屬陽，險阻屬陰。東南屬陽，西北屬陰。幽明便是陰陽。蓄（卷74:13）。』『文公易說』「問，仰以觀於天文，俯以察於地理，天文爲陽，地理爲陰，是否。曰，然。然天亦具陰陽。日是陽，月是陰，晝是陽，夜是陰。地，東南是陽，西北是陰，平坦是陽，險阻是陰。高者是陽，下者是陰。吳必大録（卷10:2-3）。」ここでは文意の明瞭な『朱子語類』に従う。
- 54) 『周易傳義』「變化非因形象而後有也。變化流行非形象，則無以見。故因形象而變化之迹可見也。日月星辰，象也。山川動植，形也。象陽氣所爲。形陰氣所爲。然陽中有陰，則，日星陽也，月辰陰也。陰中有陽，則，山陰而川陽（卷10上:5）。』『文公易說』（表1文献番号55，四庫第18冊pp610卷9:8）に重出。
- 55) 「往古來今謂之宙，四方上下謂之宇（齊俗訓，卷11:9）。」
- 56) 『周易新講義』「夫陰陽相摩剛柔相錯幽變化事有經緯，天之文也。…高下相傾廣輪相維，動植之所生，形勢之所宜，地之理也（卷8:12）。」李衡『周易義海撮要』（表1文献番号33，四庫第13冊pp517卷7:16）に重出。

文 献

- 秋山元秀（2013）：前近代東アジアの地理学。人文地理学会編『人文地理学事典』66-69，丸善書店。
- 井川義次（2009）：『宋学の西遷－近代啓蒙への道』人

- 文書院.
- 犬竹正幸 (2002) : 『カントの動力的空間論』 哲学, 53, 107-115.
- 今井宇三郎 (1958) : 『宋代易学の研究』 明治図書出版.
- 海野一隆 (2004) : 『東洋地理学研究 大陸編』 清文堂出版.
- 木下鉄矢 (1999) : 『朱熹再読 - 朱子学理解への一序説』 研文出版.
- 辻田右左男 (1971) : 『日本近世の地理学』 柳原書店.
- 西川 治 (1985) : 『人文地理学入門 - 思想史的考察』 東京大学出版会.
- 堀池信夫 (1996/2002) : 『中国哲学とヨーロッパの哲学者 (上・下)』 明治書院.
- 牧尾良海 (1974) : 『朱子と風水思想』 智山学報, 23・24, 361-377.
- 水口拓寿 (2012) : 『儒教知識人による風水思想の「発見」: 朱熹以前から朱熹以後へ』 武蔵大学人文学会雑誌, 44, 388-357.
- 宮崎順子 (2003) : 『宋代の風水思想: 『地理新書』を中心に』 関西大学中国文学会紀要, 24, 49-71.
- 于 希賢 (1990) : 『中国古代地理学史略』 河北科学技术出版社. (中国語)
- 胡 欣・江 小羣 (1995) : 『中國地理學史』 文津出版. (中国語)
- 湖 廣編 (1981) : 『性理大全書』 中文出版社. (中国語)
- 朱 熹著・黎 靖德編 (1962) : 『朱子語類』 正中書局. (中国語)
- 孫 峰華 (2012) : 『基於易学与堪輿学的人地關係和諧論思弁』 地理学報, 67, 266-282. (中国語)
- 中国科学院自然科学史研究所地学史組編 (1984) : 『中国古代地理学史』 科学出版社. (中国語)
- 張 元濟編 (1919) : 『四部叢刊・淮南子』 商務印書館. (中国語)
- 張 載著, 章 錫琛點校 (1978) : 『張載集』 中華書局. (中国語)
- Schonfeld, M. (2006): The European China-Reception from Leibniz to Kant. *Journal of Chinese Philosophy*, 33, 35-49.

Definitions of “Di-Li” on Yi Studies in the Tang-Song Period

MASHITA Michihiro

Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

Di-Li (地理), supposed to be the word origin of “geography,” is authentically based on the “Yi-Jing (Book of Changes),” one of the “Five-Classics” of Confucianism. This metaphysical book has predominated in Chinese philosophy and other sciences for more than two thousand years since published. Confucians, therefore, always have relied on commentaries on this book when they defined the concept of “Di-Li.” The oldest definition of this word was noted during the Tang dynasty (618-907). This paper surveys all the relevant commentaries about “Book of Changes,” written until the Song (960-1279) period, in order to clarify how the “Di-Li,” the concept of geography in East Asia, was understood over time and how those commentaries were formed.

First, we discuss the earliest two types of definition of the “Di-Li” that was written in the Tang period: Kong Ying-da (孔穎達) considered the “Di-Li” as an orderly “structure” in landforms and vegetation; Li Ding-zuo (李鼎祚) regarded the “Di-Li” as a kind of atmospheric vertical circulation which is sensible in our “cognition”.

Next, we analyze the commentaries on Yi-Jing written in the Song period. In this period, following four types of theories about a definition of the “Di-Li” were provided: (1) “structure” as abstract positional relations; (2) “cognition” as a basis of an idealistic classification criterion; (3) “phenomenon” as an incarnation of a metaphysical principle; (4) “space” that is absolute but finite.

These diverse definitions of the “Di-Li” provided during Tang-Song period preserve certain aspects of philosophy of traditional Chinese geography.

Keywords: Traditional Asian geography, Geographical philosophy, Concept of space, Chinese philosophy, Yi Jing